

琉球大学学術リポジトリ

Ryudai News Letter `16(Vol.20)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学 公開日: 2024-05-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 琉球大学 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002020342

Ryudai

[琉大ニュースレター]

琉球大学の事業や各学部が取組が分かる!



News Letter'16



再生医療研究センター
(p20)

- p2 学長年頭挨拶
- p6 学長対談
- p12 教育・研究
- p16 就職
- p19 管理運営
- p23 社会連携
- p27 国際交流
- p30 受賞等
- p33 学生活動
- p36 その他

琉球大学附属図書館



0020228017655

Vol.20

2016.03

2016年学長年頭挨拶

1. 年頭の祝詞

皆さん、明けましておめでとうございます。
丙申年2016年の希望に満ちた新年をご家族お揃いにてお迎えのこととお慶び申し上げます。今年もすべての教職員と学生の皆さんにとって佳き一年となりますようお祈りいたします。

2. 2016年の重要性

2016年は、第2期中期目標期間が終了し、第3期中期目標期間が始まる重要な節目の年です。私が学長に就任した2013年度は、第2期中期目標期間の後半に入る年でしたが、ご承知の通り、2013年度から2015年度までの後半3年間は「改革加速期間」として設定され、「ミッションの再定義」が行われました。

同時に、各国立大学の有する強み・特色や社会的役割を踏まえた機能の強化への取組が強調され、「地域活性化の中核的拠点」、「全国的な教育研究拠点」、「世界水準の教育研究の展開拠点」という国立大学の3つの機能分化が示されました。

一方で国の予算においては、第3期における国立大学法人運営費交付金を「抜本的に見直す」とされ、「各大学が強みや特色、社会経済の変化や学術研究の進展を踏まえて、教育研究組織や学内資源配分を恒常的に見直す」ことを促す運営費交付金の配分方法が提示されました。

各国立大学の機能強化の方向性に応じた取組をきめ細かく支援するための運営費交付金配分上の3つの重点支援の枠組み、という建前ですが、それは、機能強化の方向性に応じた重点配分を行う運営費交付金配分の「3類型化」に他なりません。国立大学の淘汰の始まりを告げる「3類型化」であるように思われます。

重点支援①～③がその枠組みであり、それは3つの機能分化と呼応した形となっています。本学が選択した重点支援①の内容は、「主として、人材育成や地域課題を解決する取組などを

通じて地域に貢献する取組とともに、専門分野の特性に配慮しつつ、強み・特色のある分野で世界ないし全国的な教育研究を推進する取組等を第3期の機能強化の中核とする国立大を重点的に支援する」こととなっています。

重点支援①の内容から本学の強化すべき機能（ミッション）を整理すると、「地域社会のシンクタンクとして様々な課題を解決する地域活性化の中核的拠点」の機能と、「特化した（とんがった）分野における日本あるいは世界トップの教育研究拠点」としての機能が求められていることとなります。

このようなことから、第3期中期目標・中期計画の前提となる長期ビジョンでは、「地域とともに未来社会をデザインする大学」を新たに掲げ、これまでの「アジア・太平洋地域における中核的な教育研究拠点」と併せて、大学像の二本の柱に設定しました。

3. 2015年の取組の概要

それでは、本学は、第2期から第3期にスムーズに移行することができるのでしょうか。その準備がどの程度行われているか、2015年（度）の取組状況を振り返ってみましょう。

まず、全学的マネジメントによる機能強化の観点から、これまで個々のセンター等の組織で推進されていた教育、研究及び社会連携活動とそれらのエネルギーを集約し、組織的に支援・推進できる機構へと改編いたしました。

2015年1月1日付で、研究力強化を目的とした研究推進機構を立ち上げ、新たに研究企画室（URA室）と戦略的研究プロジェクトセンターを設置しました。4名のリサーチアドミニストレーター（URA）を配置し、本学の特色ある研究を推進する上での効果的な体制整備が強化されたと思っています。

7月1日付けで、教育力強化を目的としたグローバル教育支援機構を設置し、学生を入学か

ら進路決定まで一貫して支援し、社会が求める有為な人材を育成していく仕組みを確立しました。年度途中の設置であったため、多くの負担をおかけしていますが、運用面での課題を克服することによって、第2期の教育改革であるURGCCを拡充させつつ、教育の質の保証やグローバル化に対応した取組が円滑にできるものと確信しております。

社会連携推進機構については、2016年4月1日の設置へ向けて、準備を進めているところですが、発足した暁には第3期の重点施策を推進するための3つの軸がしっかり立つこととなります。加えて、この3軸を貫く国際連携推進本部（仮称）が設置されると、当面の運営上の枠組が整うこととなります。

次に、部局の活動状況についてみてみましょう。

教育面では、文科省の大学の国際化を支援する「国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム」に人文社会科学研究科、理工学研究科（理学系）及び保健学研究科が採択されました。

同プログラムを有効に活用し、人材育成を通じた国際貢献と国際人材ネットワークの構築が期待されます。

研究面では、理学部の国際サンゴ礁研究教育プログラムや戦略的国際研究交流推進事業（頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム）等が順調に進捗し、英文のオープンアクセスブックの刊行などによって、本学の強みである島嶼亜熱帯環境のブランド力を世界に発信しています。

法文学部では、水中文化遺産の調査研究を通して水中考古学研究を継続して実施するとともに、国際沖縄研究所と共同で自立的島嶼社会の創生に寄与する島嶼地域科学の体系化を図る取組を進めています。

観光産業科学部では、経済産業省の補助事業である産学連携サービス経営人材育成事業に採択され、その事業のアウトプットとして3年後を目処にサービス産業学（仮称）の設置を目指しています。これに加え、琉大サテライト・イ

ブニング・カレッジを開校し、社会人と学部学生向けに実践的カリキュラムを提供しています。この事業の3つのプログラムが、履修証明プログラム制度として国から認められました。

教育学部では、平成28年4月の教職大学院設置、平成29年4月の生涯教育課程廃止を含めた学部改組、教育委員会との連携強化及び学校現場の課題解決支援事業の推進等に取り組んでいます。

工学部では、平成29年4月開設を目指して、地域振興を担う工学系人材育成に向けたカリキュラム改革を軸として、夜間主コースの廃止も含めた学部改組が大詰めを迎えています。

農学部では、地域資源を活用した6次産業化への貢献に向けて、沖縄県等の自治体や企業等との連携による研究開発・商品開発事業や、次世代の人材開発に挑戦する高大連携事業等への取組を強めています。

医学部では、医学教育の国際化への対応、国際医療拠点の形成に向けた共同研究や基本構想及びキャンパス移転への取組、沖縄県や企業とタイアップした再生医学研究の推進、地域の医療拠点機能の強化等に取り組んでいます。

次期共同利用・共同研究拠点（2016～2021年度）に認定された熱帯生物圏研究センターは、同センターの強みであるフィールド等を生かしたサンゴ礁、マングローブ、感染症、遺伝子等に関する研究を推進しています。

国際沖縄研究所については、文系の共同利用・共同研究拠点形成へ向けた予算措置がなされる予定なので、特色ある研究テーマの選定と機能強化が急がれます。



地域連携関係では、2013年度から実施しているCOC事業に加え、今年度から新規事業としてCOC+事業が採択され実施中です。これで、体制整備ができましたので、あとはいかにして地域と連携して実績を上げるか、に本学の機能強化の中身がかかっています。

昨年は、沖縄県、宜野湾市、一般財団法人沖縄美ら島財団と包括連携協定を締結しました。重点支援①に掲げる機能を十分に果たすためにも、自治体等との包括連携協定はたいへん意義あるものであり、地域の自治体等と連携することにより、さらなる地域の発展に貢献する取組を定め、全学を挙げて推進していきましょう。

国際連携関係では、トビタテ！留学JAPAN地域人材コースに採択され、全国版の日本代表プログラムと合せて本学の学生10名が元気よく留学生として飛び立っています。また、留学生30万人計画の実現に向けた事業である住環境・就職支援等受入れ環境の充実事業にも新規採択され、沖縄県内の留学生を対象に生活支援と就職支援を行い、留学しやすい環境を作っていくこととしています。

さらに、2015年5月、本学とハワイ大学システム及び名桜大学の3大学間でコンソーシアム協定を、県系のデービット・イゲハワイ州知事の同席のもとで締結し、琉球諸語、観光、自然科学などさまざまな分野での沖縄とハワイの連携を強化していくこととなっています。

施設整備面では、附属図書館の改修事業が進行中です。附属図書館は耐震性能が低かったことから、耐震補強と併せて機能改善を図るため、2014年度の補正予算で事業採択を受けたものです。多くの利用者の皆さんに不便をかけていますが、改修後は、新しい機能を備えた図書館に生まれ変わる予定です。具体的には、アクティブラーニング・エリアや国際エリアが新設されるほか、女性研究者支援活動等に関する書籍コーナーの確保等、新しく生まれ変わります。

総合情報処理センターでは、キャンパス情報システムを更新し、クラウドの活用環境の整備、Web Classの機能向上、セキュリティ機能の強化等、新しい時代にあった機能改善が図られて

います。

紙幅の都合で、すべてについて言及することはできませんが、以上の他、各部局において多くの取組がなされてきました。皆さんのご労苦に感謝申し上げます。

4. 2016年の挑戦

次に、第3期に取組む予定の本学の戦略の主なものを列記いたします。2016年度は、第3期中期目標期間の初年度であり、可能な限りよいスタートを切りたいと思います。文科省は昨年6月8日付けで通知文書を出し、その中で「第3期中期目標期間においては、国立大学法人がこれまでに果たしてきた役割を引き続き十分に果たしていくとともに、持続的な競争力を持ち、高い付加価値を生み出す国立大学にさらに発展するため、変化する社会状況をふまえた国立大学の役割を改めて認識し、機能強化に取り組んでいく必要がある」ということを述べています。このことを念頭に置き、次の6年間を有意義なものとするため、改めて機能強化に向けた日々の改革・改善を進めて行くことの重要性を強調したいと思います。

2016年度の運営費交付金概算要求には、戦略性が高く意欲的な目標計画と重点支援①における取組を重点的取組構想として盛り込みました。下記の4件がその概要ですが、本学が重点的に取り組んでいく機能強化事項であると同時に、全学を挙げての対応が求められる重要な取組となりますので、ご協力の程、よろしく願いいたします。

概要1：国際通用性のある体系的な学士教育プログラムの確立

概要2：地域資源を活用した地域イノベーションを支える学術基盤と研究開発力の強化

概要3：産学官民協働による実践型教育システムの構築

概要4：沖縄県地域医療構想における高度急性期医療を担う地域完結型医療の中核的役割

もちろん、これら4つの取組だけが本学の重点的な事項ではなく、関連する取組を同時に巻き込んでいく必要があります。例えば、概要4に関しては、国際医療拠点形成に向けた機能強化を並行して取組んでいかなければなりません。

本学の教育・研究・社会貢献機能を強化していくための重要な方策として、教育改革を基盤とした学部・大学院の改組についても進めて行かなければなりません。この4月1日の教職大学院の開設を皮切りに、第3期に向けて進行中の学部改組計画を後押ししたいと思います。学部においては、教育学部、工学部、農学部それぞれが2017年度改組に向けた準備を進めております。大学院については、現在、大学院改組タスクフォースにおいてその新しい組織のあり方について検討している段階です。

これらの改組案件は、地域や社会が求める人材育成と研究力強化を基盤とした社会貢献を果たしていくために、全学を挙げて取組むべき第3期の重点事項であり、学部間あるいは学外機関の枠を超えた教育連携や研究連携を強力に推進することで、より高い成果を生み出していくと考えています。

2016年度には第2期中期目標期間の法人評価が行われます。プロジェクトシートをもとに、この6年間の取組の中で特記できる事項について拾い上げていただければと思います。ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

5. 長期ビジョン実現に向けた挑戦

以上において述べてきた戦略的な取組は、2050年の創立100周年を見据えて、今、どのような「実が稔る種や苗木」を植えなければならないか、という意識に基づいたものです。

今日、明日が大事であって、そんな先まで考えるのは現実的でない、という声もありました。しかし、この大学は今在籍している学生や在職している教職員だけのものではありません。この大学は沖縄の地にあって、未来を担う世代のものでもあります。未来の世代に何を残すべき

かを考えるのが、今という時を共有している私たちの責務であり、大学人として持つべき矜持だと信じます。

大学改革に関する政府の各種会議での提案をみると、大学のガバナンス改革のためには、学長のリーダーシップの発揮による、各大学の強み・特色を活かした教育研究組織の再編成の推進、人材・システムのグローバル化による世界トップレベルの拠点形成の推進、イノベーション創出のための教育研究環境整備の推進、人事・給与システムの改革の推進、優秀な若手研究者・外国人研究者の活躍の場の拡大等々が列挙されています。

運営費交付金が増額されることのない現状を踏まえると、すべての大学構成員が一様に満足できる状況を導き出すことは難しいことです。ある分野に資源を向けると、他の分野への資源配分が減るという状況にあります。これから求められるのは、既得権に基づく要求ではなく、実績や必要性に基づく要求ということになりそうです。

インド生まれの宗教哲学者・ジッドゥ・クリシュナムルティは、「責任のないところには、自由も存在しません。責任とは、自由にに基づきながらあらゆる挑戦に対応することを意味します」と言っています。今年も、未来の社会を見据えて挑戦し、成長していこうではありませんか。

2016^{ひのえさる}(丙申)年1月4日
第16代学長 大城 肇



地方創生と琉球大学に求められる人材育成

沖縄銀行取締役会長
沖縄県経営者協会会長

安里 昌利

琉球大学学長

大城 肇

平成27年9月11日（金）沖縄銀行本店応接室にて

琉大ロースクールと沖銀の リーガル・アシスタント制

大城：本日はたいへんお忙しい中、時間をとっていただき、ありがとうございます。よろしくお願ひします。

安里：こちらこそよろしくお願ひします。

大城：まずはご報告とお礼を申し上げたいのですが、今年の司法試験に琉大から6人合格して、沖縄銀行のリーガル・アシスタント2名も合格しました。ご支援していただいた結果が出ました。

安里：わずかな生活費程度ですが、やはり企業が人材を育てるといのは非常に重要だと思っています。

大城：すごい励みになっています。

安里：まさかそこまで皆さんが頑張ってくれるとは思いませんでした。過年度も含めると、これまでリーガルスタッフとして採用された19名のうち12名が合格しました。

大城：これは文科省からも、他の地域の法科大学院にはない良い取組だと評価を受けています。

安里：企業にとっても、優秀な人材が巣立っていったというのは非常にプラスになります。それともう1つ、リーガル担当として働いた者が難関をパスしたとなると、行員はいろんな資格試験にチャレンジしていますから、逆に皆の励みになっているんです。



左から 大城学長、安里会長

沖縄の歴史に学ぶグローバル精神

（壁にかかった琉球王国大交易時代の進貢船
帰国の図を見ながら）

大城：これは、今の明治橋あたりになるんですか。

安里：向こうが奥武山で、こういった船で、進貢だったり、貿易をやっていたというようなことで、その時の果敢な精神を、ぜひ我々も学ぼうということです。

大城：大交易時代は「津梁」（しんりょう：かけはし）という言葉をよく使っていますね。琉大は「知の津梁」と使わせてもらっています。知のかけはし。

安里：なるほど。しかし、本当に今でも全く通用するような表現ですよ。

大城：そうです。

安里：琉大は、そこを今しっかりやっておられる。

大城：あの時代の人たちはやっぱりグローバルですね。

安里：本当ですよ。しかも昔は技術も発達していませんから、台風リスクというの負いながらやっていたんですね。

大城：そうですね。

安里：だから積極果敢にやって、多分1つの航

海が成功したら膨大な利益が出たという
ような状況があったようです。ですから、
リスクを冒して行ったんですね。



大城：大交易会^{注1}が文字どおりこれの現代版と
いいますか、具体化になってますね。

安里：第2回大交易会が、今年は11月26日（木）
～27日（金）にあります。今、バイヤー
の誘致、それと出展企業の誘致に動いて
まして、バイヤーが150社、そのうち120
社ぐらいが海外からの誘致で、30社ぐら
いは国内の輸出商社が入ってます。出展
企業は200社、これは北海道や青森から
も全国33都道府県から参加します。

大城：すごい一大ビジネスセンターになります
ね。

安里：各県ともそれぞれ特産品を持っています
ので、あの国際物流ハブを上手に使って
もらって、そうすることによってあそこ
からどんどん成長していけばいいわけ
です。やっぱり沖縄の地理的な特性、有利
なものをしっかりと生かさないといいな
いじゃないですか。地方創生ではないん
ですけれども、せっきくインフラとして
ハブがつくられてますから、そこをし
っかり生かすことによって地方が盛り上
がるだろうと期待しています。

大城：そうですね。去年、九州の産学官のフォー
ラムを糸満市で行ったとき、地元の大学
として出たんです。九電の会長さんと
かが来られて、そのときのテーマが「九
州は沖縄から何を学ぶか」だったん
です。グループディスカッションして、
私のグループはなぜ沖縄は人口が増
えるのかとか、観光客がなぜ増えて
いるのか、というところがすごい魅力
として九州の皆さんに映っている
みたいでした。

安里：なるほど。

大城：ただ、私としては、こういう面もあるが、

例えば離島などは必ずしも人口が増えて
いるわけじゃないし、厳しいところは
まだありますよという話をいたしました。



安里：九州に九経連（九州経済連合会）とい
うのがありまして、年に1回は沖縄と交
流しているんです。その中で観光につ
いては、かなり沖縄に関心を持って
まして、伸び率だとか、観光客の数も
多いものだから、そこはぜひ連携し
ようという考えがありまして、意見交
換をやってます。クルーズ船が沖縄
だけに寄港するのではなくて、沖縄
に来て福岡まで回ってもらうとか、
そういったのをもっと商品化して
連携できないかとか議論していま
す。

その前は道州制がよく議論されたん
ですが、今、少しトーンダウンして
いるんじゃないですかね。今のとこ
ろ、あまり道州制の議論はない
ですね。

大城：そうですね。もう地方創生のほうに話
は移ってきていますね。

安里：地方創生法というの、地方を元気に
するひとつの大きなインパクトに
なるんじゃないかと思えますね。

■ グローバル人材育成と学びなおし

大城：もともと沖縄の特性として、万国津梁
の鐘にあるように、いやが上でも国際
化と地域、ローカルとグローバルが
表裏になっていると思っています。
沖縄では表裏だから琉大の特性とし
ても地域特性と国際性というのは
両面だといつも言っています。

安里：そうですね。

大城：ですから地域貢献しようとしても、
どうしても周りのアジアを巻き込
まないとい

けないし、国際的な話をしようとしてもローカルと関係するというのはあります。

安里：やはりアジアに一番に近い関係で歴史的にも大交易時代というのがあったわけですから、その地理的な特性というのは、ずっと一緒です。

たまたまグローバル化、あるいは国際化がなかなか進まない中で、沖縄は東京から見ればローカル、海の彼方だという位置づけでしたけれども、アジアがこれだけ成長すると、一番アジアに近いという意味で沖縄の役割が非常に違ってきます。

私は大交易会に少しかかわっている中で、サプライヤーは基本的に英語がしゃべれないとだめだと感じています。大交易会当日は通訳を35～36名ぐらい準備していますが、通訳の皆さんというのは一般的なことしか話せないわけですよ。片言で発音は下手でもいいから、自分の商品を英語で説明できるようなレベルはぜひ必要だなと感じるんです。片言でもいいから、あるいは訛りの入った日本語風の英語でいいですからしゃべりなさいと、だからそういう語学も研修しなさいということを行っています。

実は外国人観光客が、去年は57%伸びているんですが、外国人が国際通りに行っても、なかなか対応しきれてないわけですね。そういう意味で、グローバル人材は語学も含め、商談の仕方も大学の機能をぜひ生かしていただいて、経済界と連携してほしいと思います。

大城：英語で商談もできるグローバル人材が必要とされているということですね。沖縄銀行頭取の玉城義昭さん、それから沖縄経済同友会事務局長の比嘉正彦さんのご尽力で、「トビタテ！留学JAPAN」の地域人材コースも採択されて、グローバル人材の育成というのをすでにスタートしています。それから、もう1つやろうとしているのは、せっかく海外からの留学生が今、琉大に270名ぐらい、県内全体では400名ぐらい来ているので、今度は彼らを直接使ったほうがいいんじゃないかと。彼らは語学は問題ないので、さっ

きおっしゃったようなビジネスに必要な知識と、インターンシップなどをやりたいと思っています。

安里：人材育成も学び直しも必要だなというふうに思います。本当は我々の銀行の若手にも、学び直しのような形でお願いしたいんです。銀行員でも大学で学んだ後、実際、実務に就くと勉強しないといけなことがたくさん出てくるんですよ。例えば、統計学的なことも必要ですが、なかなか専門的に習っていないくて、これを大学のご専門の先生に講義してもらえればということもありますし、学び直しがどうしても必要になります。

大城：産業経営学専攻の方では、産業支援センターで社会人の学び直しのためのサテライト・イブニング・カレッジをやっておりますし、経済学専攻の方では政策評価について、今は行政の皆さんを対象に、大学院で政策評価のための統計分析とか政策論とかをやっていきます。

地域のニーズといえば経済界のニーズという部分は大きいです。ちゃんと地域のニーズを聞いているかというのは、例えば人材育成をやるときに、産業界がどういう人材を求めているかということに応えなければいけない。今回の留学生にビジネスに必要な知識の教育をして就職を支援しようという事業もそういうところがあって、こういう人材が沖縄で必要なもので、その育成は国立大学の役割だということです。そういう意味で会長が以前、内閣府沖縄総合事務局のサービス人材育成に関わっておられましたが、それも実際、観光とか物流の人材育成として経済産業省の予算をもらうことができたんです。ああいう形で経済界のニーズに我々が応えて、このようなニーズが出ているから、こういう人材を育成したいというので予算をつけてもらう。そういう形で、今、少しずついい方向にまわっているかと思っています。

■ 沖縄の若者の気質

大城：1993年か94年ころに、当時の通産省の仕事で海外進出企業の調査をしたことがあります。日本企業の海外進出が盛んになったころです。そのときに大連に池宮印刷さんが、厦門に沖縄関ヶ原石材さんが行っておられたので、この2社を中心に調査しました。また、現地のJETRO（独立行政法人日本貿易振興機構）で、日本の企業がなぜ進出に失敗したかというところを、サクセスストーリーではなくて、例えば大連あたりは3,000社ぐらい入ってきて、その半分は撤退していつているという話があって、なぜ失敗したかというのをずっと聞き取りしたら、やっぱり人でした。



安里：パートナー？

大城：はい、パートナー。途中で制度が変わったという答えもあったんですけど、パートナーにふさわしい相手をちゃんとつかめたかどうかというのがありました。

安里：信頼できる相手かどうかですね。実は、沖縄の北谷町出身で、金城拓真君という若い人（33歳）が私のところによく出入りしているんですが、彼はアフリカのタンザニアで大成功しているんですよ。韓国の大学に留学していた頃にタンザニア出身の友だちができて、その友人から誘われて中古車の輸出をしたことがきっかけで、今やタンザニアでタクシー業、運送業、宝石業、建設業など幅広くやっています。彼は、進出した企業の成功率が5%だと言っています。あなたが成功している秘訣は何なのかと聞いたら、やっぱり彼の人柄というんですか、あまり儲けを追求してないんですよ。必要に応じて

企業を広げていって、どちらかということに地元で喜ばれるような、地元のためにといいことでやったようです。これがビジネスが拡大するようになったポイントかと思います。彼は、タンザニアの貧困街に住んでいるようなんです。彼が歩くと、「金城、金城」って子どもたちが声をかけるといいます。やはり地元で受け入れられてビジネスも成功するんですね。

大城：これはさっきの調査のときに感じたのですが、池宮印刷も関ヶ原石材も、ある意味では地域密着型で受け入れられているところでした。沖縄から行った社員は寮で地元の皆さんと一緒に住んでいるんですよ。

安里：なるほど、とけ込んで。

大城：寝食も一緒にしているからすぐ意気投合して、技術を教えてもうまくいく。それがあるのかなと思いました。そのときに、沖縄の気質、沖縄の若い人がそうですけど、外国にあまり抵抗がなく、外国人と接するのはうまくできているんじゃないかと。

安里：そうですね。

大城：だから私は、うちの学生は国境は意識してない、琉大生はもともとグローバルですという話をしているんです。

■ 大学と経済界の連携による 島嶼国支援

大城：（資料提示）ご存じかもしれませんが、大学の類型化が始まりまして、大きく国立大学を3つに分けて、①が地域活性化の中核となって、また、特定分野で世界水準を目指す大学。②は特定分野で世界水準を目指す大学です。③は全学的に世界最高水準の教育研究を目指す大学です。

安里：①がやっぱり多いんですね。

大城：こちら側は地域貢献をするというところと、その大学の強みで全国あるいは世界でトップにいけるようにということで、実は琉大はあまりPRしてないんですけど、大きく言うと島嶼研究、海洋研究、健康・長寿研究、このあたりはかなり上位なんです。国内ではトップに行くこと

も可能だと思います。だから、そこは強みとして出しているんです。

安里：国立大学改革プランでいろいろ目指してもらっていますが、この中で学長のリーダーシップについても言及していますね。ぜひ我々としてもリーダーシップをしっかりと発揮してもらえそうな環境づくりをやっていただきたいです。

大城：私の性格的なものもあるかもしれませんが、リーダーシップといっても、トップダウンとはちがう。まず自分でアイデアを出して、それをみんなで共有して全員でいこうというような形です。ですから、琉大内で改革の方向性として、内部的に琉大創生プランというのをつくった。「創生」という言葉は政府が使う前に使っているんです。新しい建物にも地域創生研究棟と名づけたんです。その後に政府の地方創生という言葉が出てきた。あれはだから政府のほうがパクったんじゃないのという話です。(笑)

安里：そうですね(笑)。やっぱりベースにあるのは日本は少子高齢化に入りますし、それと財政も非常に厳しい環境にありますし、何よりも特に東南アジアの台頭で、総体的に地位が低下していますね。

大城：おっしゃるとおりです。

安里：そういう中で日本の活性化、日本をどう盛り上げていくか。やっぱり地方大学が非常に大きな力を発揮してもらいたいと思います。国立大学改革プランには、財政の充実、拡充、事業収益を明確にすべきだという項目がありますね。そういう観点で私が提案したいのが、JICAのODA支援への協力なんです。大洋州のパラオ、ミクロネシア、マーシャル諸島、トンガなど14カ国・地域がありますが、そこは島嶼国がほとんどですから、その事業は沖縄の企業でやってほしいというJICAの要請があるんですよ。それで3年前に水ビジネス検討会というのを立ち上げて、大洋州の水事情だけでなく、エネルギー問題、環境問題を沖縄の島嶼性の技術を使って整備できないかということで、検討しているんですが、これを琉大と提携できないかと思っています。

大城：それは是非やりたいですね。第2回太平洋・島サミットを沖縄でやったときに、外務省からの要請で、環境関係の3社ほどを推薦したことがあるんですが、諸事情で実現しませんでした。今またお話が進んでいるのでしたら良かったですよ。

安里：太平洋・島サミットは7回やっていますが、そのうち3回は沖縄でやっています。この意味合いは、やはり環境が島嶼性という意味で沖縄と似ているからですね。沖縄の技術をODA事業に生かしたいということです。私達としては、琉大のご専門の先生方と連携して、そこで技術確立ができればと考えています。水ビジネス検討会は、経営者協会が事務局になって立ち上げていますが、相手は行政、国が出てくるわけです。けれども、こっちは民間ですから県にも組織に入ってもらいたいのですが、なかなか進んでいませんので、国立大学が入ると大きな位置づけになります。これは国際交流にもつながっていきますし、また、例えば工学部の専門の先生と連携することになれば、当然そこに学生も入ってこないといけないです。学生もまた現地に行って活動する。そういった意味で、事業収入だけでなく人材育成にもなります。

大城：相乗効果ができますね。今、概算要求しているんですが、本格的にアジア・太平洋地域の拠点を形成しようとしています。琉大は太平洋島嶼国の大学とは、北マリアナ短期大学以外は交流協定を結んでいるんです。パラオとかミクロネシア、マーシャルなどは、大学も短大までしかないので、人材育成も含めてその短大を卒業した皆さんを琉大に引き受けて、できたら大学院まで行けるようなプログラムをやるとうのを提案しているんです。

安里：でしたらなおさら、ODA事業は国との親交、友好関係も築けますし、あるいはJICAの対外政策もプッシュできますし、いろんな意味で大学側に大きなノウハウ、可能性は秘めているのではないかと思いますね。これは今、大洋州ですけれども、いずれは東南アジアの新興国も

マーケットになると思います。琉大と連携ができれば非常に強みですから、どこかでそういう検討をさせていただきたいと思いますね。

大城：わかりました。ありがとうございます。海外進出を経済界と一緒にやっていくのは、そのへんかもしれないですね。



改革の必要性

安里：学長は琉大を改革していい大学にもっていかうと努力しておられますが、私もバブル崩壊の真っ直中に9年間頭取をして、思い切った改革をやるとうしました。改革するときには必ず抵抗勢力がある。抵抗勢力があるというふうに思わないといけないです。私のときも、会議でもやっぱり否定的な意見がでました。そこを突破していかないといけないんです。苦しい局面ですけど、突破していかないといけない。最終的には、結果を出したら後でわかってくれるみたいことがありますので。

私が心配したのは、我々は公的資金を入れなかったものですから、どういうふうにして危機意識を浸透させるのかということがひとつの悩みでもあったんです。ですから、沖縄県はオーバーバンキングだということをわざと前面に出していました。オーバーバンキングの地域は統廃合が必ず出てくるんだと。そこで吸収される銀行になるのかどうか。そこをぜひわきまえろということで、それで危機意識を浸透させることができたところがありますね。

大城：私が琉大創生プランをつくったり、学長選のときに言っていたのは、変わらないと生き残れないということです。例えば

ハブでも脱皮しないと生き残れないでしょうという話で、改革をやるというのを旗印にしたら、たまたま学長になった25年度から大学改革加速期間と文科省が位置づけたものですから、ちょうどタイミング的によかったと思っています。

人材育成への期待

大城：最後に、琉大の同窓生として、大学に対する期待も含めて一言お願いします。

安里：大学改革プランというのは、ある意味では待ったなしで、日本の経済、日本の社会は非常に厳しい局面に来ているという見方ですね。少子化・高齢化の中で、あるいは海外からこれだけ押されていますが、大学が本当に大きく変わっていったら、民間までインパクトがあると思うんです。国立大学の中期目標・中期計画期間も第1期、第2期と進んで、また来年度から第3期が始まるということですが、幸いにもこの改革期に大城学長が登壇されて、琉大が大きく改革発展していくものと期待しています。その中で、私は経済界の1人として、大学と経済界がティアップすることによってWin-Winの関係が築けると信じています。何よりもそこに人がいて、その人材をブラッシュアップするのが得意なのは地方の大学ですし、琉大は産業界や行政にもこれだけ人も送り込んでいますから、非常に大きく貢献すると思います。琉大に人材をつくりあげていただく、それが沖縄の大きな発展につながります。また、なかなか難しいところではありますけれども、我々は側面からバックアップしながら大学改革を応援したいと思いますので、学長のリーダーシップを発揮してぜひ頑張りたいと思います。

大城：今日は長時間、たいへん貴重なお話をありがとうございました。

注1：沖縄大交易会。食品専門の商談会、ビジネスマッチングイベント。全日本空輸、ヤマト運輸等のロジスティクスを活用した沖縄の国際物流ハブ化を促進することによって、海外での販路拡大の一助となることを目的に平成26年11月に第1回を開催。



教育・研究

p12



就職

p16



管理運営

p19



社会連携

p23



国際交流

p27



受賞等

p30



学生活動

p33



その他

p36

教育・研究

琉球大学第4回研究推進フォーラムを開催

平成27年7月26日(日)、研究企画室主催で第4回研究推進フォーラム「平成26年度戦略プロジェクト研究報告会 2～“文化”の過去・現在・未来を考える～」が開催されました。本フォーラムは、昨年度に実施した中期計画達成プロジェクト経費のうち、本学の研究をより戦略的に推進するための戦略プロジェクト研究として採択された共同研究のうち、人文・社会科学系分野2件の成果報告会としておこなわれ、理事や教職員、大学院生など約25名が参加しました。

はじめに、国際沖縄研究所狩俣副所長から「グローバル社会における主体的島嶼社会創生をめざした総合的研究」の報告がありました。琉球列島の島々では、島嶼社会の個性的な環境と歴史的背景のもとに、固有の文化を発展させてきましたが、現在は自然環境の変化や後継者不足などの影響を受けて、文化継承の危機に直面しています。このような現状に対して、学内外の研究者や地方自治体等と協働し、無形・有形文化財のレッドデータリスト作成を試みていることが報告されました。

つづいて、法文学部池田教授から「継続性と断続性—自然・動物・文化—」と題する報告がありました。本研究では、「継続性」と「断続性」をキーワードに、考古学や歴史学、ゲノム人類学、生物学等の多彩な分野の研究者が集い、琉球列島を含む地球上の人間や動植物の「文化」や「社会」について総合的に検討をおこなったことが報告されました。

総合討論では、高橋URAの進行で、研究推進機構の本村副機構長(学長補佐)をコメンテーターとし、報告者や会場参加者と共に、本学における人文・社会学系分野研究の特色や強み、今後の方向性について活発な議論がおこなわれました。そして、地域固有の研究にとどまるのではなく、学問として体系化するためにも外へ向けて研究成果を積極的に発信していくことの重要性が再確認されました。今後も、研究企画室では、このような研究交流の場を積極的に設置し、本学の研究の活性化を支援していく予定です。



本学の人文・社会学系研究の今後について活発な議論がおこなわれた総合討論



報告する池田栄史教授(法文学部)



報告する狩俣繁久教授(国際沖縄研究所)

琉球大学の研究事業から生まれた成果を使って泡盛の新商品が開発されました

琉球大学農学部外山博英教授のグループ、奈良先端科学技術大学院大学の高木博史教授のグループ、株式会社バイオジェットの3者がコンソーシアムを作って、平成24年度から26年度まで、沖縄県の「琉球泡盛調査研究支援事業」に取り組みました。以前から業界から強い要望があった課題として「新たな泡盛開発につながる醸造技術」「泡盛風味のパラエティー化」の取り組みを進め、新規泡盛酵母101H株を開発するに至りました。

101H酵母は、現在泡盛醸造に広く用いられている101号酵母を基にして育種した結果得られた、特徴的な香気成分バランスを有する新たな泡盛酵母株です。101号酵母は、新里酒造の社長 新里修一氏が、沖縄国税事務所の鑑定官であった時に、それ以前に泡盛製造に適した酵母として使われていた泡盛1号酵母から、醸造中に高泡を形成しない酵母として新たに単離開発した酵母で、現在ほぼすべての泡盛製造会社で使用されている、泡盛製造に適した非常に優れた性質を持った酵母です。この101号酵母から、奈良先端科学技術大学院大学 高木博史教授が保有する育種技術を応用して取得したのが101H酵母である。泡盛醸造工程で、酵母はアルコールやクエン酸等の強いストレス環境下で効率的に醸造を進める性質が必要となります。有用アミノ酸高蓄積という特性を持つように育種された酵母はこれらのストレスに対する耐性が向上することが確認され、さらにそれらの中から泡盛の風味に影響を及ぼす株が存在していることが確認され、特に優秀な泡盛酵母として101H酵母が選抜されました。

新里酒造では本研究成果を高く評価し、101H酵母を用いた泡盛の商品化へ向けた取り組みを平成27年2月より開始しました。醸造条件や製造工程を検討した結果、101H酵母の特徴を最大限引き出す条件を見出すことができました。新規酵母を使って製造された、その酵母の名前を冠した泡盛新製品「101H(常圧蒸留)」「101H(減圧蒸留)」が、沖縄の産業まつり(10月23-25日)にて限定販売されるに至りました。

このことが、平成27年10月21日に沖縄県県庁の記者クラブで発表されました。

「101H(常圧蒸留)」「101H(減圧蒸留)」は共に101H酵母の特徴を十分に引き出した風味で、ブランデー様(甘い)、果実様(フルーティー)の風味を楽しむことができます。実際に含有成分を分析した結果、泡盛の風味に関わる複数の成分が多く存在しており特徴的な風味に仕上がっていることが確認されています。



101H(常圧蒸留) 101H(減圧蒸留)

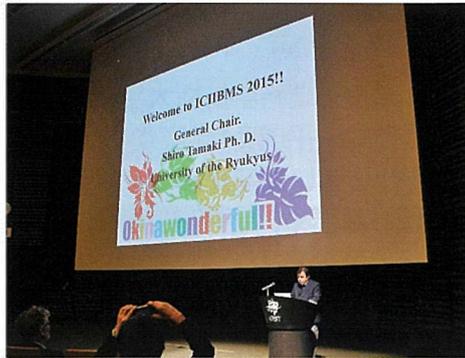
国際会議「2015年知的情報処理と生物医科学国際会議」を開催

去る11月28日(土) - 30日(月)に沖縄科学技術大学院大学(OIST)において、琉球大学工学部、OIST、および、沖縄高等工業専門学校の主催による“1st International Conference on Intelligent Informatics and Biomedical (ICIIBMS2015)”(2015年知的情報処理と生物医科学国際会議)が開催されました。

同国際会議は「知的情報処理と生物医科学の融合」、そして、「Different People Share Different Views on Different Topics」をキーワードとし、「工学、物理学、化学、農学、地学などの分野における高度情報処理システムと生物医科学システムの融合分野を研究する世界中の研究者が集い、学際的交流を深め、本分野の革新的な知見を沖縄から世界へ発信する」「本県の科学技術研究教育を益々推進するための一翼となること」を目標に掲げ、具体的には以下の3分野を主なテーマに設定し、構成されました。

1. 高度信号処理、先進的コンピュータネットワークと情報通信技術
2. 人工知能、ロボティクス、ヒトとコンピュータの協創システム
3. 生物情報処理システム、生物医科学・神経科学イメージング

国内外から165名の参加があり、特別講演4件、ポスター講演33件、一般講演73件もの研究発表が行われました。特に、4件の特別講演（ブラウン大学Arto V. Nurmikko教授「神経回路のワイヤレスコミュニケーションの可能性について」、ウェイン州立大学Xen-wen Wilima Chen教授「精密健康診断のためのデータサイエンス」、沖縄科学技術大学院大学 銅谷賢治教授「人工知能と脳科学」、そして、名古屋大学門松健治教授「医学は高度データサイエンスに何を期待するか？」）は、知的情報処理と脳科学・医科学に関するものであり、同国際会議が目標とするテーマの道標的な内容でもあった為、聴講者からは非常に好評でした。



実行委員長 工学部玉城教授による大会宣言



ポスターセッションの一幕

また、会議後はOIST学内ツアーを開催しました。約20名が参加し、OISTの研究環境の素晴らしさを体験しました。

実行委員である本学工学部玉城教授は「今回の国際会議を開催するにあたり、琉球大学、OIST、沖縄高等工業専門学校、琉球大学後援財団から様々な御支援を頂きました。ここに感謝申し上げます。」と感謝の辞を述べています。

実行委員である本学工学部玉城教授は「今回の国際会議を開催するにあたり、琉球大学、OIST、沖縄高等工業専門学校、琉球大学後援財団から様々な御支援を頂きました。ここに感謝申し上げます。」と感謝の辞を述べています。

公開シンポジウム「琉球列島の自然講座」を開催

去る12月5日（土）に、県立博物館において「琉球列島の自然講座」が開催され、高校生を含む130名の方々が参加されました。同シンポジウムは本学理学部が実施する「国際サンゴ礁研究教育ハブ形成プロジェクト※」の一環として開催されたもので、理学部の教員が琉球列島の豊かな自然に秘められた魅力について紹介するとともに、温暖化やエルニーニョによる環境変動が生物に及ぼすストレスなどについても説明しました。

沖縄の自然の美しい写真や図を使って行われた講演は分かりやすく、講演終了後は、研究者だけでなく一般の方々からも質問が相次ぎ、活発な質疑応答が行われました。

【プログラム】

1. サンゴの白化はいつ起こる？その秘密とは・・・
理学部海洋自然科学科 講師 中村 崇
2. しなやかに暮らす島の植物達
理学部海洋自然科学科 教授 傳田 哲郎
3. 沖縄島の地質と成り立ち
理学部物質地球科学科 教授 新城 竜一
4. 鍾乳石の生長と鍾乳洞内の環境
理学部海洋自然科学科 教授 棚原 朗



シンポジウムと同時に、3階ロビーにおいて「国際サンゴ礁研究教育ハブ形成プロジェクト」の研究成果の一部がポスターで紹介され、多くの方々が見学に訪れました。

また、当日は同プロジェクトの研究成果を一般向けにまとめた「琉球列島の自然講座サンゴ礁・島の生き物たち・自然環境」がミュージアム・ショップに置かれ、シンポジウム後に参加者が買い求める姿が見られました。同書は、来春に増刷される予定です。

なお、同書の英語版はプロジェクトのホームページからダウンロード可能です。

<http://w3.u-ryukyu.ac.jp/coe/hub/styled-62/styled-67/index.html>

※「国際サンゴ礁研究教育ハブ形成プロジェクト」とは、地球環境変動がサンゴ礁島嶼系に生息している生物に

対する影響や、バイオミネラルの生成機構に関して、生物学、地学、環境化学など多様な観点から研究を実施するものです。本プロジェクトの活動を通して、学問の発展と地球環境の保全に寄与し、さらに若手研究者を育成しつつ、学際的サンゴ礁島嶼系システム化学の構築を目指しています。2011年～2015年の5年間に、海外との共同研究によるものも含めて、150報以上の論文・総説が発表されています。

ナイスステップな研究者11人に選定 理学部の栗原晴子助教

琉球大学理学部海洋自然科学科の栗原晴子助教が12月10日（木）、科学技術への顕著な貢献2015（ナイスステップな研究者）11人に選定されました。

同賞は、我が国の科学技術や学術の振興の政策立案プロセスの一端を担う科学技術・学術政策研究所（NISTEP）によって、科学技術に対する夢を国民に与え、わが国の科学イノベーションの向上に貢献するものと評価された研究者に授与されるもので、過去にはノーベル賞を受賞した天野浩さんや山中伸弥さん、小惑星「イトカワ」からの岩石採取に挑戦した無人探査機「はやぶさ」チーム代表、川口淳一郎さんも受賞されています。

栗原助教は世界で初めて、化石燃料の大量消費による海洋の酸性化が直接海産動物の生活史に影響を及ぼすことを示し、この酸性化が個々の生物だけでなく、生物間の相互関係を大きく変え、サンゴ礁生態系に対して大きな影響を及ぼす可能性と、この生態系の変化が海洋変動の指標となる可能性を示しました。これらの成果は、気候変動の詳細なメカニズムの解明などに貢献することが期待されています。

栗原助教は受賞について「このような名誉ある賞を受賞し、非常に驚いていると共に大変光栄に思っております。今後も海洋環境科学の更なる理解と発展に貢献できるように研究に励んでいきたいです」と述べ、来年1月に文部科学大臣より表彰予定です。

科学技術・学術政策研究所

<http://www.nistep.go.jp/activities/nistepaward>



○栗原 晴子（くりはらはるこ）

琉球大学理学部海洋自然科学科（生物系）助教
「海洋生物の観察による、地球規模で進行する
海洋の温暖化及び酸性化の把握」

主な受賞歴

- 最優秀口頭発表賞
International Conference of Echinoderm（2004年）
- 最優秀ポスター賞 日本甲殻類学会（2007年）
- 日本海洋学会 海洋環境科学賞（2013年）

越境する沖縄関係資料 ハワイ大学—琉球大学図書館合同プロジェクト「阪巻・宝玲文庫デジタル化」 事業報告・研究報告会開催

去る12月16日（水）に琉球大学50周年記念館において、琉球大学附属図書館とハワイ大学マノア校図書館による合同プロジェクト「ハワイ大学所蔵阪巻・宝玲文庫デジタル化プロジェクト事業」の事業報告・研究会が開催されました。

阪巻・宝玲文庫は、イギリス人ジャーナリストであるフランク・ホーレー氏の旧蔵資料の内、琉球・沖縄関係の資料とハワイ大学教授の阪巻駿三博士の資料を合わせた資料群として、現在はハワイ大学マノア校ハミルトン図書館に所蔵されています。1400年代から1960年代までの貴重な琉球・沖縄関連の文献であり、当該期の経

済状態や戦前の行政、歴史・地理、地図、産業、琉歌、私製本や絵画作品などを示す、戦禍によって多くの史資料を消失した沖縄県にとって、琉球・沖縄研究において欠くことの出来ない貴重なコレクションです。

本プロジェクトは、ハワイ大学図書館と琉球大学附属図書館の連携の下、文献をデジタル化し、オンラインで広く公開したプロジェクトであり、これにより世界中どこからでも資料の閲覧が可能になりました。教育や学習、研究への活用、また琉球・沖縄史の研究の更なる深化が期待されています。関連する事業の一部については、事業が評価され公益財団法人図書館振興財団の助成金を受けて実施しています。

事業報告・研究報告会では、大城肇琉球大学学長、ハワイ大学マノア校図書館長アイリーン・ヘロルド氏、琉球大学附属図書館花城図書館長より開会の挨拶があり、その後琉球大学附属図書館富田職員より事業経過報告、ハワイ大学マノア校図書館日本研究専門司書である登紀子・山本・バゼル氏、琉球大学法文学部赤嶺教授より基調講演がありました。

さらに、研究報告として、附属図書館職員の久貝典子、崎原綾乃、富田千夏、山本ちひろによる研究報告があり、阪巻・宝玲文庫の資料が多岐にわたる分野の研究にとって大きな意義のある資料群であることが報告されました。

12月18日（金）には沖縄県副知事安慶田光男氏を表敬訪問し、プロジェクトの報告を行いました。安慶田副知事からは「本プロジェクトは一つの事業を、国境を超えた多くの人々が協働したところが意義深い。また、ハワイと沖縄は歴史的にも交流が深く、これを機により一層絆を深めていければ」と述べられました。最後は出席者全員で記念撮影を行い、和やかな雰囲気の中に表敬訪問が終了しました。



ハワイ大学マノア校図書館長
アイリーン・ヘロルド氏



県内外の研究者や一般市民が来場

■琉球・沖縄関係貴重資料デジタルアーカイブ
<http://manwe.lib.u-ryukyu.ac.jp/d-archive/>

■ハワイ大学マノア校図書館所蔵阪巻・宝玲文庫について
<http://manwe.lib.u-ryukyu.ac.jp/d-archive/sakamaki-hawley.htm>

就職

うりずんプロジェクト2015夏期インターンシップフェアを開催

平成27年5月23日（土）10時～15時30分まで、琉球大学大学会館3階特別会議室で、うりずんプロジェクトの「2015夏期インターンシップフェア」が開催されました。

うりずんプロジェクトとは、文部科学省の大学改革推進等補助金事業の「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業【テーマB】インターンシップ等の取組拡大」で採択された沖縄型のインターンシップ事業（正式名称：うりずんプロジェクト～「沖縄型」インターンシップの展開～）で、琉球大学が幹事校となり、名桜大学、沖縄大学、沖縄キリスト教学院大学及び沖縄国際大学の4大学が連携校となって、インターンシップを活用したキャリア教育を行う体制の整備や、学生と企業等との懸け橋となるインターンシップの仕組みづくりを行っています。

インターンシップフェアの内容は、次のとおりです。

【第1部】10：00～12：00

1. インターンシップ・プログラムの説明等

就職センター インターンシップ・コーディネーター 川平 敦

2. 講演「インターンシップ活用術」

沖縄タイムス社 編集局社会部 記者 伊禮 由紀子 氏

3. 「エントリーシート・履歴書作成のポイント」

株式会社ニッチ 代表取締役（キャリア・アドバイザー） 次呂久 由利恵 氏

【第2部】13:30～15:30

4. インターンシップ受入企業によるブース説明会

5. 交流会

同フェアでは、まず、松本剛就職センター長による挨拶の後、川平敦コーディネーターから、うりずんプロジェクトで実施するインターンシップの内容及び種類等について概要説明があった。続いて、琉球大学を一昨年卒業し、沖縄タイムス社記者となった伊禮由紀子氏による「インターンシップ活用術」と題する講演があり、その中で「インターンシップでは自分を良く見せようと肩肘はらずに自分が成長する場ととらえること」、「社会人と接する練習になる」、「学生時代に、失敗を恐れず自分の能力より少し高い目標を設定して自分に負荷をかけたことが社会に出てから役立った」等、自身のインターンシップ経験を通して数々の貴重なアドバイスがありました。

引き続き、キャリア・アドバイザーの次呂久由利恵氏による「エントリーシート・履歴書作成のポイント」の説明では、自分が企業の人事担当者なら履歴書のどの部分を見るか、その理由は？という問いかけから始まり、良い履歴書例、悪い履歴書例を使った実践的な内容で説明を行い、参加した学生らはすぐに応用できるポイントを学ぶことができました。

午後からは、インターンシップ受入企業等担当者によるブース説明会がありました。開始前に松本剛就職センター長から「企業等担当者から一方的に話を聞くだけでなく、必ず質問するように！」と学生を激励し、学生達は20分ごとにブースを移動しながら、次々と企業の業務内容やインターンシップ取組み等の説明を聴き、どこにエントリーするか真剣に考えていました。

終了後の学生アンケートでは、「インターンシップは職場体験であって、仕事を体験するものだと考えていましたが、その他にも社会人として働いている人とのふれ合いの中でマナーや自分の得意・不得意を見つけ、改善できる機会であることに気付かされました」、「自分は現在2年次で、当初インターンシップは3年次から始めようと思っていたが、今回の機会を得て積極的に今からインターンシップなどに参加しようと思った」など、参加した学生からは、満足度の高いインターンシップフェアとなりました。(アンケート回収55名中、とても満足(36)、まあまあ満足(19)との回答結果)

【参加学生内訳】

学校名	1年次	2年次	3年次	4年次	院生	計
琉球大学	4	13	29	1	1	48
名桜大学	0	4	3	0	0	7
沖縄大学	0	0	3	1	0	4
沖縄キリスト教 学院大学	0	0	0	0	0	0
沖縄国際大学	0	0	5	0	0	5
沖縄女子短期大学	3	0	0	0	0	3
合計	7	17	40	2	1	67

【参加企業等内訳】

企業等区分	企業等・団体数	参加者数(人)
企業等(ブース含む)	34	56
大学等	5	17
行政機関	2	3
合計	41	76



【第1部】インターンシップ・プログラムの説明



【第2部】受入企業によるブース説明会の模様

平成27年度琉球大学就職センターと保護者との懇談会を開催

「平成27年度琉球大学就職センターと保護者との懇談会」は、琉大祭の開催時期に併せて、平成27年9月26日（土）及び27日（日）の両日開催の予定でしたが、台風21号の強風等の影響が予想されたため、参加者の安全を考慮して27日（日）の琉大祭中止に伴い、懇談会は26日（土）のみの開催となりました。

同懇談会は、昨年度同様、学部1～3年次学生の保護者を対象に「最近の大学における就職状況について、大学と保護者との相互理解を深める」ことを目的に実施しました。懇談会には、琉大祭の見学も兼ねて、124名の保護者が県内外から参加されました。

懇談会第1部（13：00～14：30）では、松本就職センター長の開会挨拶の後、キャリア・アドバイザー（次呂久由利恵さん）による就職活動支援状況の報告があり、その後「就活の心構えと就職センターの利用について」松本就職センター長が説明しました。

続いて、公務員、県内及び県外企業の内定学生6名による就職活動の体験報告があり、その中でも特に就職活動期間中における保護者（親）との関わり方については関心が高く、保護者の方々も熱心に聞き入っていました。

質疑応答では、「保護者（親）と関わりたがらない時期の学生（子）にどのように接して行けば良いか」などの質問があり、内定学生から、「学生（子）の意思を尊重しながらも、保護者（親）の考え方を言い続けることにより、学生（子）は不満そうに見えて（内心では）理解していけるのでは」などの意見がありました。

第2部（14：40～16：00）として、場所を就職センターに移し、保護者による個別就職相談及び就職センター見学会を実施しました。

終了後のアンケートでは、保護者から、満足度が高く、参考になったとの意見が多く寄せられました。



平成27年度就活キックオフセミナーを開催

去る11月9日～13日に、学部3年次・院1年次の学生を対象に、「就活キックオフセミナー」が開催されました。就活キックオフセミナーは、3月からスタートする就職活動（就活）の前に、流れ及び心構え等を、学び確認するものであり、4回を通して延べ291人の学生が参加しました。

セミナーは、松本就職センター長の開会の挨拶及び講演に始まり、パワフル・サポート専任コーディネーターによる就職ガイダンス、内定を獲得した先輩達の体験談、学生からの先輩達への質問などから構成されており、専任コーディネーターからは「一日の計は晨（あした）にあり」と早めに取り組むことの重要性が話され、先輩達からはインターンシップやOB訪問、公務員試験に向けてのモチベーションの保ち方などについて、アドバイスがありました。また、「就職活動にあたって特別な対策はしていなかったが、元々自分のやりたい業界なので、分かっている当然のはず」「元々資格試験を通じて働きたい分野の勉強をしておき、就職先の社員の方とも顔見知りであった」など、早い段階から情報収集や活動をしていたことなど、具体的な体験談を披露し、参加学生は熱心に耳を傾けていました。

参加学生は「実感が湧いた」「就職活動がどういうものなのかイメージすることが出来た」「モチベーションが上がった」などと話し、来る3月から本格的に解禁となる就職活動に向けて、気持ちを高めていました。



パワフル・サポートの専任コーディネーター



熱心に聞き入る学生

平成27年度「国家公務員研究セミナー」等を開催

平成27年11月30日(月)13時から琉球大学大学会館3階の特別会議室において、平成27年度「国家公務員研究セミナー」が開催されました。

このセミナーは、県内学生への国家機関への興味・関心を高め、公務の重要性や国民生活との関わりへの理解を深めるため、人事院沖縄事務所が主催し、琉球大学就職センターが共催して実施したものです。

セミナー当日は、沖縄管内に所在する国家の機関(20機関)が個別ブースを設け、参加学生が各ブースを自由に参加できる形式とし、1回25分の業務説明を6回実施しました。参加学生は、興味・関心のある国家機関のみならず、日頃はあまり接する機会のない別の国家機関ブースを訪れ、各機関担当者の説明に熱心に耳を傾けていました。

当日は、253人の学生等(既卒者含む)が参加し、参加者からは、「知らなかった機関や、機関名だけでは分からなかったことも知ることができて良かった」、「漠然としていた国家公務員の仕事について詳しく聞いて、以前より興味をもてるようになった」等の回答がありました。

また、今回の「国家公務員研究セミナー」に先立ち、11月24日(火)13:30から大学会館3階で、県内女子学生等を対象とした平成27年度「女性のための国家公務員セミナー」も開催され、国家公務員の仕事の魅力、仕事と育児の両立、転勤など、女性ならではの視点で女性公務員による講演と女子学生とのフリートークが行われ、109人が参加しました。



参加者との座談会を開いた機関



パワーポイントを用いて説明する担当者

管理運営

平成27年度琉球大学入学式・大学院入学式

平成27年4月3日(金)、琉球大学入学式及び大学院入学式が沖縄コンベンションセンター展示棟で行われました。

本年度の入学生は、学部学生1,643名、大学院生324名、特別支援教育特別専攻科7名の総計1,974名です。

なお、学部入学生代表宣誓を、農学部亜熱帯地域農学科の上江洲 希佳さん、大学院入学生代表宣誓を医学研究科池原 由美さんが行いました。



総合情報処理センターISMS認証授与

琉球大学総合情報処理センターは、平成27年4月13日付で、BSIグループジャパン(株)から、情報セキュリティマネジメントシステム(ISMS)の国際規格ISO/IEC27001:2013 / JIS Q 27001:2014の要求事項に適合し、ISMS認証登録を取得しました。

平成27年4月28日には、学長へ今回の認証登録を報告いたしました。

認証登録範囲は、総合情報処理センターが提供する学内情報基盤(教育・研究用電子計算機サービス、学内ネットワーク)サービスとなります。



IS 622502 / ISO 27001



ISO27001の認証を取得することは、組織の情報セキュリティ管理体制の整備や学内組織の体質強化、情報を扱う教職員の意識・スキル向上につながるだけでなく、対外的にも情報セキュリティの信頼性を向上させることができ、国際的にもアピールすることができます。

総合情報処理センターは、平成26年4月から施設面などの物理的セキュリティと情報を取り扱う手順書の整備などソフト面の両方の整備を開始し、(株)サン・パートナーズの支援を得て、BSIジャパンの一次審査、二次審査を経て認証の獲得に至りました。今後は、BSIグループジャパンによるサーベイランス審査を毎年受けつつ、情報資産の管理を厳密に行うことで、社会に対して信頼される大学の情報機関として役割を果たしてまいります。

再生医療研究センター オープニングセレモニー及び内覧会を開催

平成27年6月28日(日)11時から、琉球大学医学部再生医療研究センターにおいて、オープニングセレモニー、内覧会が行われました。

本センターは、ロート製薬(株)から寄贈された2階建ての建物(延床面積812 m²)の1階部分に、沖縄県の先端医療産業開発拠点形成事業で整備された本格的な細胞培養加工施設(床面積224 m²)を有しています。当センターの業務は、細胞培養加工施設を維持管理・運営しつつ、安全な再生医療用の細胞を供給し、医学部附属病院や医療機関、研究機関、企業などと連携して優れた再生医療研究を実用化することです。

オープニングセレモニーには、翁長雄志 沖縄県知事(代理出席)、山田邦雄 ロート製薬株式会社 代表取締役会長兼CEO、牧野守邦 沖縄総合事務局 経済産業部長、島居剛志 文部科学省高等教育局医学教育課 課長補佐、大城肇 琉球大学学長、松下正之 琉球大学医学部長、藤田次郎 琉球大学医学部附属病院院長を始めとし、100名近くが参加しました。



今後、本センターにて実用化された再生医療を多くの患者さんに提供し、沖縄県の健康社会の実現と再生医療の産業化推進に貢献することが期待されています。

【テープカットの様子】(右から)

松下 医学部長

島居 文部科学省高等教育局医学教育課課長補佐

大城 学長

翁長 沖縄県知事(代理出席)

山田 ロート製薬株式会社 代表取締役会長 兼CEO

牧野 沖縄総合事務局 経済産業部長

藤田 附属病院院長

「エコクリーンデー in 琉大」を実施

7月15日、エコロジカル・キャンパス構築活動の一環として、「エコクリーンデー in 琉大」が実施されました。実施に先立ち、エコロジカル・キャンパス推進委員会の堤（つつみ）副委員長が挨拶し、「エコクリーンデーは毎年好天に恵まれます。今年も炎天下での作業となりますので、熱中症に気をつけて清掃作業を行ってください。」との注意がありました。その後、それぞれの担当区域へ移動し、草刈り、ゴミ拾い及び分別などの作業を行いました。



堤副委員長の挨拶



ループ道路

医学部附属病院が病院機能評価 3rdG:Ver1.1 認定証を受領

このたび、琉球大学医学部附属病院は8月7日付けで公益財団法人日本医療機能評価機構から病院機能評価（3rdG:Ver1.1）の認定証交付を受け、藤田病院長が大城学長及び須加原理事に報告しました。

今回は3回目の更新認定となっており、「患者中心の医療の推進」「良質な医療の実践」「理念達成に向けた組織運営」の3つの項目で審査されました。

職員が一丸となって改善に向けて取り組むことで、実質的な医療の質向上が図られました。今後は、審査を受けることで明らかになった課題を改善するとともに、自律的かつ継続的な医療の質向上を図ってまいります。

認定期間は平成27年5月30日から平成32年5月29日までの5年間となっております。



左から藤田病院長、大城学長、須加原理事



第1回 認定第JC509号

認定期間：平成17年5月30日～平成22年5月29日

第2回 認定第JC509-2号

認定期間：平成22年5月30日～平成27年5月29日

第3回 認定第JC509-3号

認定期間：平成27年5月30日～平成32年5月29日

厚生労働省「子育てサポート企業」に認定され、「くるみんマーク」を取得

去る11月30日（月）に本学第2階会議室にて、くるみんマーク認定授与式がとり行われました。

本学は、平成27年11月9日付けで、沖縄労働局長から次世代育成支援対策推進法（以下「次世代法」）に基づく「基準適合一般事業主（子育てサポート企業）」と認定され、「くるみんマーク（次世代認定マーク）」を取得しています。

次世代法は、次代の社会を担うすべての子どもが健やかに生まれ、育成される環境の整備を図るために制定されたものであり、「くるみん」とは、赤ちゃんが大事に包まれる「おくるみ」と、「職場ぐるみ・会社ぐるみ」で仕事と子育ての両立支援に取り組もうという意



味が込められています。

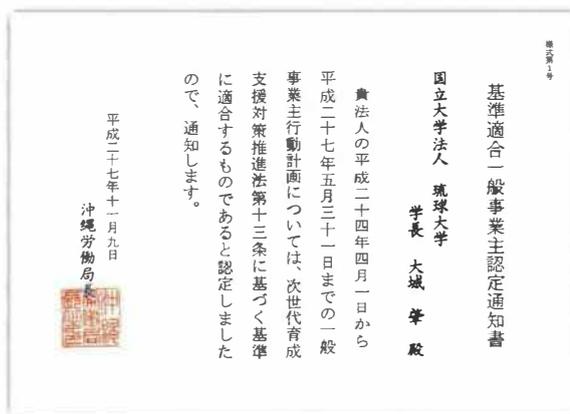
本学は、職員の仕事と子育ての両立を支援するために策定した「国立大学法人琉球大学一般事業主行動計画（第3期）」において、「計画期間内に目標の5倍の男性10名が長期間の育児休業を取得」「女性は期間内に出産した203名に対し、期間内に232名が育児休業を取得し取得率114.3%」「法人独自に制度に関するガイドブックを作成（外国籍の教職員も活用できるよう、英語表記もあり）」「学内通信に男性育児休業取得者の事例を紹介し、取得を奨励」した点など認定基準9項目を満たし、この度の認定となりました。沖縄県内では14例目の認定、教育研究機関としては県内第1号です。

今回「くるみん」マークを取得したことで、本学のホームページ、印刷物、職員の募集要項等への掲載や名刺などへの使用が可能になります。

本学では今後も職場環境や教育・研究環境の整備・充実に取り組んで参ります。



認定式の様子



認定通知書

学生と学長との懇談会を開催

去る12月9日（水）に本学で「学生と学長との懇談会」が開催されました。

同懇談会は、教育環境、教育方法の改善、学生生活支援、キャリア支援などについて学生と意見交換を行い、今後の教育改善、学生生活等の充実を図ることを目的としたものであり、平成16年度から毎年開催しています。大学側からは大城肇学長、渡名喜庸安理事・副学長が、学生側からは課外活動団体（体育系・文化系）のリーダー等9名が出席しました。

当日は、「各課外活動団体のリーダーとしての在り方（自覚・責任等）及び大学への要望等」をテーマに、それぞれの課外活動の状況、リーダーとして得たことや責任、心懸けていること、留学生との交流、今後の目標、大学への要望など、活発な意見交換が行われました。

大城学長からは「出来る事は早急に対応したい。失敗を恐れず大きくチャレンジし、活躍して欲しい」と激励が送られました。

今後、学生から寄せられた意見等も踏まえ、本学の教育・学生生活支援の在り方について検討していくこととしています。



懇談会の様子

琉球大学サテライト・イブニング・カレッジ開設式典を開催

本学では、平成27年4月16日（木）に沖縄産業支援センターにおいて、本学学生、一般社会人の受講生及び関係者の出席の下、琉球大学サテライト・イブニング・カレッジ開設式典を開催しました。

本カレッジは、平成25年度文部科学省「地（知）の拠点整備事業」に採択された本学の「ちゅら島の未来を創る知の津梁（かけ橋）」事業のプログラムの一つである「学び直し充実強化」の一環として平成27年度から開講するものです。

本カレッジの授業科目は、県内の産業界や各企業、各種経済団体に対してニーズ調査を行い、地元が求めるニーズを十分に把握し、それに適う実践的・応用的なカリキュラムを本学の学生のみならず、一般の社会人にも提供するものです。

授業スタイルは、原則的にPBLと呼ばれる「課題解決型学習法」を採用し、グループワークやロールプレイング、ケース・スタディ、ディスカッション、プレゼンテーション等の学習方法を用いています。

また、本カレッジの開講日は、昼間働く社会人への利便性を考慮し木曜日・金曜日の夕方と、土曜日の午後に行い、また場所は、本学の西原キャンパスを離れ、市街地からも近郊の沖縄産業支援センター（那覇市小禄在）で行います。

これにより、多くの働く社会人に対する学び直しの機会の提供や、本学学生が、社会人と交流することにより、実践的で直接的に現場の声が聞け、広い視野と多角的・多角的な分析力が養われることを期待しています。

式典の開会に先だち、本学の大城学長、外間理事・副学長、志村観光産業科学部長、牛窪産業経営学科長、下地学長補佐による琉球大学サテライト・イブニング・カレッジ看板の除幕が行われました。

その後、会場を移し式典が開会され、大城学長と志村学部長による挨拶、本学役員と担当教員の紹介が行われ、式典は終了しました。

式典終了後、初めての講義として、「人的資源管理論基礎・応用」、「財務管理論基礎」及び「経営管理特殊講義Ⅺ（ビジネス・アカウントティング基礎）」が行われ、受講者である本学学生及び一般社会人は熱心に講師の話に耳を傾けていました。



【琉球大学サテライト・イブニング・カレッジ看板除幕の様子】
左から志村学部長、大城学長、外間理事・副学長、
牛窪学科長、下地学長補佐



【グループワークによる講義の様子】

琉球大学・名桜大学・ハワイ大学システムが コンソーシアム協定を締結

平成27年5月12日、琉球大学・名桜大学・ハワイ大学はハワイ州政府庁舎において、コンソーシアム協定に調印しました。調印式には県系のデービッド・イゲ知事も同席され、「今年は沖縄県とハワイ州の姉妹都市締結30周年にあたる。沖縄とハワイの大学が連携することの意義は大きい」と述べられました。

ハワイ大学は沖縄研究に関する豊富な蓄積があることで知られており、このたび3大学が連携することにより琉球諸語、観光、自然科学などさまざまな分野で一層研究が進むことが期待されています。



前列左からラスナー総長（ハワイ大学）、
山里学長（名桜大学）、イゲ知事、大城学長（琉球大学）

大城学長と名城大学の山里学長は、研究だけでなく教育面でも効果が期待されると話し、学生交流促進にも意欲をみせました。ハワイ大学システムのラスナー総長は「協力関係がさらに強化される」と期待しました。

※ハワイ大学システム：3つの4年生大学及び7つのコミュニティーカレッジを有する大学組織



沖縄県と国立大学法人琉球大学との包括連携協定の締結

去る平成27年9月14日（月）、沖縄県庁において、沖縄県と琉球大学との包括連携協定締結式が関係者による出席の下、執り行われました。

本包括連携協定は、沖縄21世紀ビジョンで示された目指すべき将来像の実現や地方創生の着実な推進などに向けて、沖縄県と琉球大学が有する資源の効果的な活用と、緊密な連携・協力により、地域の様々な課題に迅速かつ適切に対応し、活力ある個性豊かな地域社会の形成・発展に寄与することを目的とするものです。

これまで、本学と沖縄県との間では、いくつかの分野において、連携協定を締結し、連携事業を推進してきました。例えば、平成19年度の産業振興に関する連携協定や、平成24年の沖縄県インターンシップの取り扱いに関する協定などです。

本包括連携協定締結により、今後、沖縄県において、様々な分野において、連携・協力が推進されることとなります。

式典では始めに、協定締結内容の確認が行われ、その後、両機関の代表である、翁長雄志沖縄県知事と大城肇琉球大学学長が協定書に署名し、協定が締結されました。

その後、翁長知事と大城学長から挨拶があり、翁長知事は、「本協定締結により、沖縄県は、沖縄の自律的発展、地域の活性化や県民サービスの向上のため、多分野において、一層効果的な施策の実施に努めていく」と述べられました。

大城学長は、「今後、沖縄県をはじめ、関係機関や民間企業との連携・協力により、地元のニーズに一層機動的に 대응することができ、県民の皆様から愛される大学として、全学を挙げて取り組んでまいります」と決意表明しました。

【連携・協力分野】

- (1) 環境の保全及び緑化の推進に関する事。
- (2) 文化の振興に関する事。
- (3) 保健医療、福祉の向上に関する事。
- (4) 共助・共創型地域づくりの推進に関する事。
- (5) 観光リゾート産業や農林水産業をはじめとする各種産業、科学技術の振興に関する事。
- (6) 雇用創出、若者定着の取組に関する事。
- (7) 離島の振興に関する事。
- (8) 国際交流の推進に関する事。
- (9) 教育、人材育成に関する事。
- (10) その他、本協定の目的を達成するために必要な事項に関する事。



協定書署名後の記念撮影



関係者による記念撮影

「グッジョブ☆にしはら わくわくワーク」に参加 —産学官包括連携協定締結に伴う事業協カー—

「地域の子供は地域で育てる！」をテーマに、2015年9月23日（水）に西原町町民交流センターで開催された「グッジョブ☆にしはら わくわくワーク」（主催：西原町就業意識向上支援事業連絡協議会）に、琉球大学工学部技術部から16名の技術職員が参加しました。これは、琉球大学と西原町、西原町商工会との包括連携協定締結に伴う取組の一環として参加したものです。

工学部技術部では、西原町の小中学生を対象とした、体験学習「電気を見てみよう！測定器の操作体験」、モノづくり「世界一簡単なモーターをつくろう！」と「ネジをつくって コマを組みたてよう！」の3テーマを提供し実施しました。さらに、アトラクションとして「空気砲・風船輪くぐり」と「サンシン演奏ロボット」も実施してイベントを盛り上げる役割を果たしました。

今回の「グッジョブ☆にしはら わくわくワーク」は、多種多様な職業を体験することで職業に対する視野が広がり、小中学生と保護者にとって職業観の育成に繋がる貴重なイベントになりました。当日は450人の児童・生徒が参加し、一般の方を含めると1,000名を超える来場者があり、イベントは大盛況のうちに終了しました。

今後も琉球大学工学部技術部は、産学官包括連携協定締結に伴う事業協力を機に西原町内の小中学生（保護者含む）に「モノづくりの大切さ！」や「学ぶことの大切さ！」が体験できる「場」を提供していきます。



世界一簡単なモーターをつくろう！



空気砲

大学コンソーシアム沖縄第2回シンポジウム2015を開催

去る10月10日（土）、沖縄コンベンションセンター会議棟において、大学コンソーシアム沖縄主催による第2回シンポジウム2015が開催されました。

本シンポジウムは昨年のキックオフシンポジウムに引き続き、第2回目として開催され、「グローバル人材の育成」をテーマに、駐日米国大使のキャロライン・ケネディ氏や海外からの来賓をお招きし、盛大に開催されました。

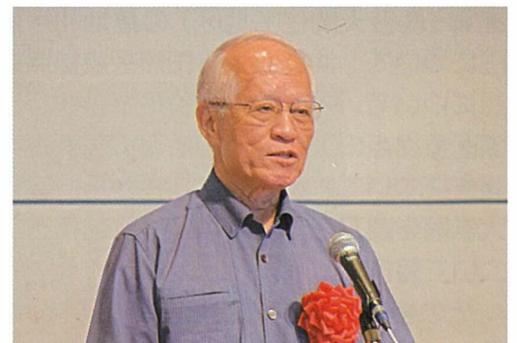
初めに、学生会議代表の20名とケネディ大使による懇談会が行われました。懇談では学生一人ずつの紹介が行われ、その後、ケネディ大使から「何か要望はありませんか」との質問が出され、ある学生から「是非、うちの大学へ来学してもらいたい」との要望が出されました。時折笑いを誘う和やかな懇談となり、参加した20人の学生は、大変有意義な時間を持つことができました。

続いてのシンポジウムでは、瀬名波榮喜代表理事の歓迎の挨拶の後に、浦崎唯昭沖縄県副知事による沖縄県知事の来賓挨拶の代読が行われ、続いて駐日米国大使のキャロライン・ケネディ氏が基調講演を行いました。

基調講演においてケネディ大使から、「地域社会あるいは国家にとって教育ほど重要で長期的な課題はない。島嶼コミュニティの沖縄は、気候変動、エネルギー安全保障、海洋の持続可能性、海上安全保障や自由貿易といった問題の最前線にあり、これらは、地域の問題ではなく、国際的な難題である。それらを解決するためには、様々な国の人々が協力し、創



瀬名波代表理事による歓迎の挨拶



知事来賓の挨拶を代読する浦崎副知事

造的かつ批判的に思考し、お互いの言語で明確に伝達することが求められる。教育と留学はその前進に不可欠である。平和の夢は、すべての人々が共有するものであり、私たちが力を合わせ、お互いに信頼を持ち続けられれば、平和と調和を手に入れることができる」と述べられました。また併せて、経済的に恵まれぬ成績優秀な学生に対して、アメリカ国務省より総額2300万円近い無利子の奨学金を沖縄県にある一般財団法人と連携して提供することが発表されました。

その後、日米交流財団専務理事のMs. Paige Cottingham-Streater (ページカッティンガム ストリータ) 氏からご来賓の挨拶をいただき、国際連合広報センター所長の根本かおる氏から、「Your United Nations 国連を自分事に」をテーマに基調講演が行われました。

続いて、パネリストとしてご来賓のMs. Paige Cottingham-Streater 氏及び基調講演者の根本氏、観光産業界から(一財)沖縄観光コンベンションビューロー会長の平良朝敬氏、沖縄学生会議代表者(琉球大学学生)の嘉陽宗一郎氏、主催者代表3人が登壇し、パネルディスカッションが行われました。本パネルディスカッションは、会場とパネリストによる質疑応答型で行われ、会場からは、活発な質問や意見が出され200人以上を越す参加者はパネリストの回答に熱心に耳を傾けていました。

最後に大城肇副代表理事・琉球大学長から閉会の挨拶があり、シンポジウムは盛況のうちに終了しました。



ケネディ大使による基調講演

宜野湾市と国立大学法人琉球大学との包括連携協定の締結及び西普天間住宅地区における国際医療拠点の形成に関する市民報告会

平成27年11月29日(日)に宜野湾市農協会館において、宜野湾市と琉球大学との包括連携協定締結式及び西普天間住宅地区における国際医療拠点の形成に関する市民報告会が併せて開催されました。

本包括連携協定は、相互に連携・協力を図り、地域社会の発展と人材育成及び学術研究の振興に寄与することを目的としております。

包括連携協定の締結式典では、始めに協定内容の確認が行われ、その後、両機関の代表である佐喜眞淳宜野湾市長と大城肇琉球大学長が協定書に署名し、協定が締結されました。

続いて両代表から挨拶があり、大城学長は「琉球大学の地元である宜野湾市や宜野湾市民に対して、大学が持つ様々な教育研究の成果を還元し、地元の発展に寄与することは大学の使命であり責務である。本包括連携協定締結もその実現のための、第一ステップであり、始まりである」と述べました。

式典に引き続き、市民報告会が開催され、宜野湾市からキャンプ瑞慶覧(西普天間住宅地区)の跡地利用計画について、沖縄県から国際医療拠点構想について、内閣府沖縄政策担当から国際医療拠点の形成に関する海外事例視察報告について、松下医学部長から、琉球大学医学部及び同附属病院の移転構想について報告がありました。

その後、会場との意見交換が行われ、報告会は終了しました。

会場に詰めかけた約140名の参加者は、各報告に熱心に耳を傾けていました。



協定書署名後



関係者による記念撮影

留学生によるプロジェクトワーク発表会を開催

8月14日(金)、留学生センターにおいて日本語クラスの留学生によるプロジェクトワーク発表会が開催され、2015年前期日本語Ⅲ 2組、日本語Ⅲ 3組、日本語Ⅳ、日本語Ⅰの留学生達が各クラスで取り組んできたプロジェクトワークを上映しました。

留学生達は、アニメのアフレコに挑戦する、お国紹介の旅番組や琉球大学周辺のスポットを紹介する情報番組を制作する、オリジナルのシナリオで映画を撮影するなど、たいへん苦勞しながらもクラスメートが力を合わせて作品を完成させ、大きな手応えを得たようです。

発表会では、各クラスの個性あふれる発表に参加者から盛大な拍手がおくられました。



発表会のプログラムは以下のとおり

- 13:30 ~ 日本語Ⅰ
アニメ「クレヨンカンジちゃん」
- 14:00 ~ 日本語Ⅳ
旅番組「小さな世界一周」
- 14:30 ~ 日本語Ⅲ-3
情報番組「琉大周りの秘密ガイドブック」
- 15:00 ~ 日本語Ⅲ-2
オリジナル映画「白昼食堂」

平成27年度前期「短期留学プログラム」8月修了式を挙行

8月18日(火)、大学会館において、「短期留学プログラム」の8月修了式が挙行されました。「短期留学プログラム」とは、琉球大学の学生交流協定締結校から派遣された交換留学生在が本学で日本語や日本・沖縄文化、各専門分野などを学ぶプログラムです。

修了式では、今期修了者のうち出席した38人に大城学長から修了証書が授与されました。続いて、学長から「留学によって得た国際的な人と人との繋がりは皆さんの一生の宝物です。沖縄での経験を糧とし、母国と琉球大学の架け橋としてそれぞれの専門分野でのご活躍を期待しています。」との祝辞がありました。

また、デヴォス ユリディス メラニ クリストフェさん(リール科学技術大学・フランス)とダオ カイル テン フィさん(イエーテボリ大学・スウェーデン)が留学生代表として挨拶し、沖縄での生活が充実した楽しいものであったこと、留学生や日本人学生に大切な友人ができたことなど、琉球大学で学んだ日々の思い出や今後の抱負を述べました。



デヴォス ユリディス
メラニ クリストフェさん



ダオ カイル テン フィさん

今期修了者：13カ国25大学より44名

修了者の出身大学

- ・国立台湾大学（台湾）
- ・国立雲林科技大学（台湾）
- ・国立台湾科技大学（台湾）
- ・国立台湾大学（台湾）
- ・東海大学（台湾）
- ・国立中山大学（台湾）
- ・ボゴール農業大学（インドネシア）
- ・ディポネゴロ大学（インドネシア）
- ・ハワイ大学ヒロ校（アメリカ）
- ・ネヴァダ大学リノ校（アメリカ）
- ・フォートルイス大学（アメリカ）

- ・パプアニューギニア大学（パプアニューギニア）
- ・リール科学技術大学（フランス）
- ・トゥールーズ・ル・ミライユ大学（フランス）
- ・福建師範大学（中国）
- ・延邊大学（中国）
- ・ラオス国立大学（ラオス）
- ・コンケン大学（タイ）
- ・ハインリッヒ・ハイネ・デュッセルドルフ大学（ドイツ）
- ・ハンブルグ大学（ドイツ）
- ・バルセロナ自治大学（スペイン）
- ・イエーテボリ大学（スウェーデン）
- ・済州大学校（韓国）
- ・ソウル市立大学（韓国）
- ・ジェームス・クック大学（オーストラリア）



集合写真

平成27年度日本企業インターンシップ・プログラム報告会・閉講式

9月16日（水）、留学生センターにおいて、「平成27年度インターンシップ・プログラム」参加学生による報告会及び閉講式が挙行されました。「日本企業インターンシップ・プログラム」とは、琉球大学の学生交流協定締結校から派遣された留学生が本学でビジネス日本語及びビジネスマナーを集中的に学んだ後、県内企業で研修するプログラムです。今年度の実施期間は、8月4日から9月16日まで約6週間でした。

報告会では、受入企業12社中6社7名の担当者が出席し、受入れた留学生の研修中の様子や感想をコメントしました。報告会終了後に閉講式が執り行われました。式では、修了する6人に留学生センター教員から修了証書が授与されました。

バーテル ルーカス（ドイツ ハイネ・デュッセルドルフ大学）さんが、留学生代表として挨拶し、日本企業での研修で自分の思い込みを変える体験ができ有意義であったと語りました。

出席企業（6社 7名）

1. 株式会社近畿日本ツーリスト沖縄
2. 有限会社スタプランニング
3. 株式会社パシフィック・ホスピタリティー・グループ
4. 株式会社沖縄タイムス社
5. 株式会社リウボウ旅行サービス
6. 株式会社トヨタレンタリース沖縄



報告する学生

修了人数：6名

企業研修参加者数：11名
(うち5名は短期交換留学生)

留学生の出身大学

国立台湾大学(台湾) 1名
国立雲林科技大学(台湾) 1名
東海大学(台湾) 1名
順天大学(韓国) 3名
木浦大学(韓国) 1名
ハインリッヒ・ハイネ・デュッセルドルフ大学
(ドイツ) 2名
ミシガン州立大学(米国) 1名
キャンベラ大学(オーストラリア) 1名

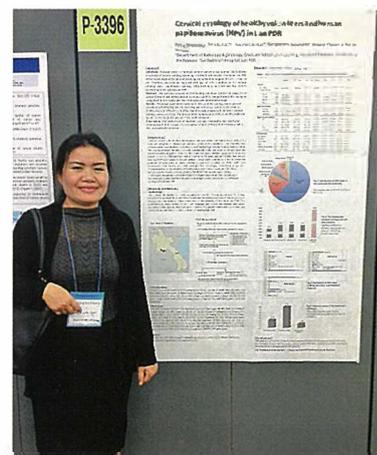
平成27年度派遣企業(12社)

1. 沖縄ツーリスト株式会社
2. 株式会社沖縄銀行
3. 株式会社沖縄タイムス社
4. 株式会社トヨタレンタリース沖縄
5. 株式会社リウボウ旅行サービス
6. 一般財団法人沖縄観光コンベンションビューロー
7. 忠孝酒造株式会社
8. 有限会社スタプランニング
9. 株式会社ラジオ沖縄
10. 株式会社近畿日本ツーリスト沖縄
11. 株式会社琉球銀行
12. 株式会社パシフィック・ホスピタリティ・グループ



平成27年度琉球大学後援財団(ラオス国教育支援事業)で Vatsana Pholsena 医師の来沖

平成27年度の琉球大学・国際交流支援事業「ラオス国教育支援事業基金」に採択された Vatsana Pholsena (ヴァサナ ポルセナ) 医師が、平成27年10月8～10日の第74回日本癌学会学術総会(名古屋)での発表後(写真1)、11～15日にご来沖し、13日には支援を頂いた琉球大学後援財団の事務局を表敬訪問し、常務理事と会談されました(写真2)。彼女は、同時に招聘した Viengvansay Nabandith (ビエンバンサイ ナバンディス) 博士の奥様であります。彼女らともに、2000年から6年間、沖縄に在留した経験があり、今回10年ぶりの沖縄再訪となりました。写真に見られる彼女らのご長男は琉大病院で誕生しており、当時を述懐してくれました。



(1)



(2)

なお、Nabandith 博士は医学研究科腫瘍病理学講座(旧第一病理学講座)で、細胞診を含む勉学をし、学位取得後、2005年に帰国しており、その後、フォローアップ事業の一環として、2007年からは、ラオスでの子宮細胞診の普及と検診プログラムを当講座とともに実施しており、そのデータの一部を今回、上述の学会で報告されました。彼らは既にラオスの医療界において、中核的存在となっており、今後も琉大との国際共同研究のコアとしてこれまで以上のご活躍が期待されています。

イゲ ハワイ州知事訪問団 本学来訪

10月9日にデビッド・イゲ ハワイ州知事率いる訪問団が本学を訪問し、大城肇学長、理事・副学長、学部長、関係教員が参加して歓迎会を開催しました。

イゲ ハワイ州知事は、昨年12月に就任され、米国で初めての沖縄系知事になりました。歓迎会には、本学の所在地でイゲ州知事ごご祖父の出身地でもある西原町より、上間明町長、宮里芳男副議長も出席されました。

訪問団は、沖縄県とハワイ州姉妹提携30周年を記念して来沖し、本学にはイゲ州知事夫妻を始め、ギルバート・カヘレ ハワイ州上院議員、リャン・ヤマネ ハワイ州下院議員、州政府関係者、ハワイ大学関係者等20名が来訪しました。

琉球大学とハワイ大学は、1988年に学術交流協定を締結して以来、長年にわたり、沖縄研究、海洋科学、医学、法学、観光学など様々な分野において活発な研究・教育交流を行い、友好関係を築いてきました。

歓迎会では、イゲ州知事から琉球大学とハワイとの交流に対して感謝状が贈呈されました。その後、訪問団メンバーと本学出席者でハワイと沖縄、琉球大学との交流等について和やかに歓談が行われました。

歓迎会に引き続き、イゲ ハワイ州知事の来学を記念して、本部棟前で記念植樹を行いました。



イゲ ハワイ州知事による挨拶



イゲ州知事から大城学長への感謝状贈呈

受賞等

第2回福島県再生可能エネルギー普及アイデアコンテスト 最優秀賞受賞

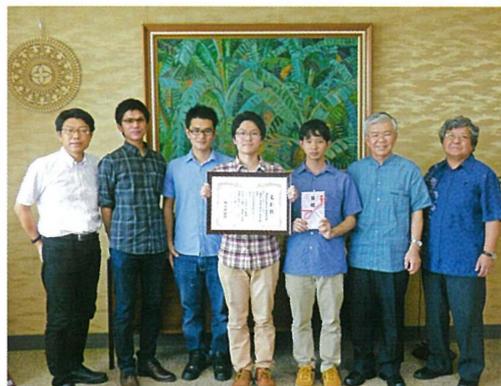
「第2回福島県再生可能エネルギー普及アイデアコンテスト」（朝日新聞社主催）で理工学研究科博士前期課程電気電子工学専攻の学生4名が最優秀賞を受賞し、6月28日に福島県で行われた表彰式で表彰状と賞金を授与されました。今回の最優秀賞の受賞は昨年の入賞につづく2年連続の快挙であり、本学学生の優秀さが証明されました。

同コンテストは、「再生可能エネルギー先駆けの地」を目指す福島県が抱える課題を解決し、再生可能エネルギーの普及を促進するためのアイデアを募集するもので、応募資格は29歳以下で高等専門学校生、大学生もしくは大学院生の個人またはグループとなっており、今年度は全国の大学等から24件の応募がありました。

最優秀賞を受賞した池間さんらは、直流送配電新技术を福島県へ導入することで再生可能エネルギーの普及につながることを示しました。直流送電は従来の交流送電より安定した長距離送電が可能で、損失が少ない等の利点があります。さらに、広域連系による系統の大規模化を図ることで再生可能エネルギーの効率的な利用や系統の安定度が改善できることを示しました。直流配電では災害時の対応策として他系統から独立しても自立運転可能なシステムを提示し、福島県へ企業誘致を促すために電気料金を低廉化する方法について提案しました。



大城学長に表彰状を披露



右から有住工学部長、大城学長、又吉さん、池間さん、上原さん、田原さん、千住教授

有住工学部長や指導教員の千住教授と共に学長室を訪れた学生らは、受賞の喜びや将来の抱負について大城学長に報告しました。大城学長は、再生可能エネルギーの普及は島嶼県である沖縄や太平洋島嶼域などでも必要とされている、今後さらなる技術開発を期待していると述べました。

観光産業科学部「スパマネジメント論」がイノベーション部門賞受賞

日本で最大のスパ展示会のスパ&ウェルネスジャパンが9月7日～9日に東京ビッグサイトで開催され、今年のトップスパを決めるスパ業界の最高位「スパクリスタルアワード2015」において、琉球大学観光産業科学部が提供する専門科目「スパマネジメント論」がイノベーション部門賞を受賞しました。

同賞は日本のスパ業界においてこれまでに見られない革新的な試み・開発をおこなう事業者や取り組みに対して贈られる賞で、大学の授業が受賞することは初めてのことです。海外ではスパ（SPA）に関する授業や専攻を有する大学はある一方、日本にはこれまで存在しませんでした。琉球大学では日本の大学として初のSPAに関する授業「スパマネジメント論」を2013年度に開講し、今年で3年目に入ります。

沖縄県ではこれまで観光リゾート地として保養産業の振興に力を入れてきており、SPAはその代表的存在となっています。世界的にウェルネスツーリズム市場は成長著しい分野で、それを支える人材育成が急務となっています。琉球大学はNPO日本スパ振興協会、沖縄県エステティックSPA協同組合と連携し、観光産業科学部の教員とスパ業界の第一線で活躍する講師陣のオムニバス形式で本授業を成立することができました。

琉球大学が率先して、全国の関係学部と同成長分野を担う人材育成の輪をひろげ、健康保養産業の高度化と健全な発展に使命を果たしていく起点になればと考えています。



授賞式の様子



記者会見での大城学長（右）と荒川教授（琉球新報社提供）

国立大学法人琉球大学観光産業科学部「スパマネジメント論」

- 琉球大学の正規授業（2単位）
- 集中講義形式 30時間（3日間）
- 「公開授業」
 - ・ 外部受講生は県内外、業界を問わず広く受講が可能（本学生定員20名、社会人定員10名）
- 観光産業科学部専任教員4名+外部招聘講師10名によるオムニバス形式

講義概要

- スパ研究の理論的裏付けと実務家の最前線実践事例
- 特色講義
 - 「スパのエビデンス」
 - 「世界のスパ市場分析」
 - 「ホテルSPAにおけるファイナンス/事業戦略」
 - 「観光とSPA」（国際観光論、沖縄観光論）など、全15講義

イリオモテヤマネコの保護活動に対して感謝状

本学理学部海洋自然科学科生物系の伊澤雅子教授が、「イリオモテヤマネコ発見五十年記念事業実行委員会（委員長 川満栄長竹富町長）」から、長年のイリオモテヤマネコの保護活動に対し感謝状を授与されました。

本年（平成27年）はイリオモテヤマネコの発見50周年にあたり、竹富町ではさまざまなイベントが実施されるとともに、今後の保護にかかる議論もなされています。平成27年10月8日に西表島で行われたフォーラムにおいて、5団体と1個人に感謝状が贈呈されました。伊澤教授は、「琉球大学では、故池原貞雄先生、故高良鉄夫先生などイリオモテヤマネコの発見当時から関わって来られた先輩方がおられます。私自身は、そのあとを継いで、イリオモテヤマネコの研究を始めて



感謝状



自動撮影カメラで撮影されたイリオモテヤマネコ

30年ほどです。研究上も未解決のことが多く、保護についても次々と新しい問題が出て来ており、まだまだです。イリオモテヤマネコの研究・保全に熱心に取り組む仲間や学生たちもいますので、これからも頑張らなくてはと責任を感じました」と話しています。

琉大博物館が 全国ビオトープコンクール日本生態系協会会長賞を受賞

去る11月16日(月)、全国学校・園庭ビオトープコンクール2015(主催・日本生態系協会)の結果が発表され、琉球大学博物館(風樹館)が上位5賞の一つ、日本生態系協会会長賞を受賞しました。

同コンクールは、本来我々の身近にあった森や林、草地、池、小川、浜辺などといったビオトープが姿を消していくなかで、学校等にビオトープがつくられ、保育や幼児教育、環境教育・ESD、アクティブ・ラーニングが展開されるようになったことを受けて、この学校・園庭ビオトープを広めるために始まりました。

本学は特別支援学校と連携した取り組みが、「学校・庭園ビオトープの実践モデルとなる優れた取り組みを行うもののうち、特に地域とのパートナーシップの観点で優れている」と評価され、受賞となりました。コンクールには全国から約160校の応募があり、県内から上位5賞に選ばれるのは初めてです。

受賞式と発表会は、来年1月31日(日)に東京で開催されます。



風樹館ビオトープ



生き物観察風景

第5回琉球ファッションデザイン選手権2015で、 琉球大学教育学部生2名が受賞

去る11月21日(土)に行われた「第5回琉球ファッションデザイン選手権 FDRモードコレクション2015」(一般社団法人ファッションデザイナークラブ琉球主催)において、崎山琴乃さん、上里奈々子さん(本学教育学部学生)が、それぞれ琉球新報社長賞と技術賞を受賞しました。

第5回は「You know? 沖縄うちなー」をテーマに開催され、琉球新報社長賞を受賞した崎山琴乃さん(生活科学教育専修3年生)は、自らの作品を「家なー(うちなー)」と名づけ、沖縄の伝統家屋をイメージした作品を発表しました。「ぽってりとした赤瓦屋根の家は、大好きなおじい・おばあとゆったり過ごす幸せな時間をもたらしてくれます。これを『うちなー』のイメージとして表現しました。」と話し、家の周りに生い茂る福木と赤瓦の屋根を、それぞれドレスのトップとスカートで表現しました。

技術賞を受賞した上里奈々子さん(生活科学教育専修4年生)は、2年前の受賞に続き2度目の受賞となりました。ボディスの格子柄は、手作業でテキスタイルから創作し、自身の出身地、宮古島の伝統工芸品宮古上布を表現しました。また、顔を囲んで隠す立ち襟は、職人である女性達の苦難の歴史を表現し、手作業による高度な創作技術が高く評価され、受賞となりました。

コンテストの上位3人は、来年1月に香港での研修に参加予定です。



崎山さんの作品「家なー」



上里さんの作品

本学教員2名が沖縄研究奨励賞を受賞

11月24日(火)、公益財団法人沖縄協会から平成27年度沖縄研究奨励賞の受賞者が発表され、本学から金城貴夫教授(医学部保健学科)及びジェームズ・デイビス・ライマー准教授(理学部海洋自然科学科)の2名が受賞しました。

沖縄研究奨励賞は、沖縄の地域振興及び学術振興に貢献する人材を発掘し、育成することを目的として設置されたもので、沖縄を対象とした優れた研究を行っている50歳以下の研究者(又はグループ)を対象としています。

金城教授は沖縄に多くみられるウイルス関与のがんの発生メカニズム研究が評価され、ライマー准教授はスナギンチャク目の生物を中心に研究し、独特の分類手法を用いて多くの新種を発見したことが評価され受賞に至りました。

授賞式は来年1月21日に那覇市のパシフィック・ホテルで行われます。

学生活動

理学部新一年生が那覇ハーリーで優勝

平成27年5月3日に行われた第41回那覇ハーリーにおいて、理学部新一年生で結成された琉球大学学生チームが、一般の部(第20レース)での優勝を果たしました。

那覇ハーリーは、琉球王朝時代の爬龍船競争として行われ、那覇の伝統行事として定着しています。



優勝を喜ぶ理学部新一年生

本年は、琉球大学からAチーム(教職員)とBチーム(学生)の2チーム体制で参加しました。学生チームは、理学部の新一年生を中心に55名の学生で構成しましたが、第20レース(一般の部)において、終盤の追い込みを制し4分34秒86のタイムで見事優勝を果たしました。来年は、教職員チームも含めて完全優勝をめざします。



優勝トロフィー

情報工学科学生たちによるボランティアビーチ清掃(第7回)

平成27年5月17日(日)9:00から1時間半、琉球大学工学部情報工学科の学生・教員有志で西原マリパークきらきらビーチの清掃活動を実施しました。晴天にも恵まれ、無事に活動を終えることができました。

参加者は計66名(教員2名、家族1名、3年次58名、4年次3名、博士前期課程2名)でした。7年目となる今回は、台風6号の後ということもあり砂浜ビーチに打ち上げられた漂着ゴミを中心に、テトラポットに入り込んだプラスチックや金属片、空き缶・ペットボトルを回収しました。情報工学科開設科目「キャリア実践」と連携して学生に参加を呼びかけましたが、教室での話だけでなく実際の地域社会への貢献活動を実行することにより、社会人基礎力の向上・定着を図ることができたと実感しました。今後もビーチ清掃を含めた様々なボランティア活動を継続していきたいと思っています。(世話人 情報工学科 岡崎威生)



平成27年度体育祭を開催

開学記念日の5月22日(金)、平成27年度体育祭が第1体育館、第2体育館や医学部体育館を始めとする体育施設で行われました。

当日は、昼間主と夜間主とで分かれて開催され、バレーボール、つなひき、ミニサッカー、卓球、アクアスロン、ドッジボール、○×ゲーム、バスケットボールといった様々な種目で熱戦が繰り広げられました。



開会式で挨拶をする渡名喜理事



開会式の様子

琉大学生起業家チームがEnactus国内大会優勝 —ワールドカップ日本代表へ—

琉球大学の学生起業家チームがEnactus JAPAN 2015で優勝し、日本代表としてワールドカップ南アフリカ大会へ派遣されることになりました。

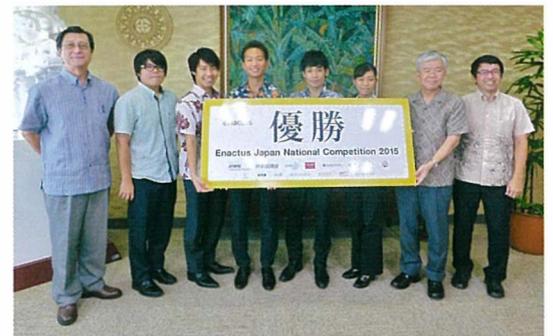
Enactus(エナクタス)とは、アメリカ・ミズーリ州に本部を置く団体で、起業家的アクションで人々の生活を変化させ、より持続可能な世界を創造するために行動するコミュニティです。Enactusは、グローバルなビジネスリーダーの養成を目的とした教育プログラムであり、世界36カ国、1,700を超える大学で70,500人以上の学生が参加しています。

Enactusは世界各国の企業・個人から資金協力や人的支援を得て学生をサポートし、学生が1年間の活動成果を発表する国内大会とワールドカップを開催しています。

このたび、琉球大学学生が立ち上げたベンチャー企業「がちゅん」が国内大会で優勝し、大城学長へ、優勝報告とともにワールドカップ出場に向けての決意表明を行いました。

「がちゅん」の代表である国仲瞬さん(教育学部)は「がちゅん」のメンバー4人とアドバイザーの宮里大八准教授と共に大城学長を表敬訪問し、沖縄に修学旅行で訪れる多くの生徒に大学生との交流を通じたアクティブラーニング「平和学習プログラム」を提供していることを説明しました。優勝のポイントとして、生徒達へ新しい学びの機会を提供し高い評価を受けていること、年間を通じて多くの実績があることが評価されたのではないかと述べました。また、ワールドカップへ向けて、琉球大学の学生としての誇りをもって出場し優勝を狙いたいとの決意表明を行い、大城学長も大いに期待していると激励しました。

なお、ワールドカップは、2015年10月14日～16日に南アフリカ共和国のヨハネスブルグで開催されます。



右から宮里准教授、大城学長、米須さん、国仲さん、塩谷さん、三上さん、當銘さん、渡名喜副学長

平成27年度「琉球大学—かりゆし沖縄観光人材育成基金 海外研修プログラム報告会」

12月2日(水)、「琉球大学—かりゆし沖縄観光人材育成基金海外研修プログラム報告会」を開催しました。琉球大学では平成24年度から株式会社かりゆしが提供する人材育成基金を活用して、海外研修及び国内研修を実施しています。

本研修は海外での学習及び事例研究等を通して、研修先の観光の現状と課題を学び、沖縄県の観光産業振興策について提案を行うとともに、学生が将来の進路を検討する上での参考にしてもらうことを主目的とし、これまでハワイ、シンガポール及び大阪・京都で研修を実施しました。4年目となる本年は、ハワイ、北京、上海、香港の4地域を対象とした研修を計画しました。

今年度から、従来のプログラムを変更し、現地での観光関係政府機関や観光産業関係者からのヒヤリングやアンケート調査など実践的な内容に変更しました。研修には全体で学生48名、教員4名が参加しました。

北京チームは主要ホテルや旅行会社訪問などを通して沖縄旅行への意識調査を行った上で、観光客誘致のための情報発信及び受入対策を提案しました。上海チームは中国人観光客の旧正月期間における沖縄への旅行に関して歓迎ムードの醸成や誘客強化策を提案しました。

香港チームはクルーズとMICEをテーマに沖縄と香港の比較を行い、クルーズに関しては「クルーズ客夜間滞在策（オーバーナイト）」提案、MICEに関しては、沖縄の素材を活用したマイスタウンの提案を行いました。ハワイチームは、ブランディングの重要性を踏まえて首里城を例に沖縄の歴史や文化に関するストーリーを明確にした情報発信や観光振興策の安定を図るための「法定外目的税」導入に関する提案を行いました。

報告会に参加した株式会社かりゆし代表取締役社長當山智士氏から各発表に関して、学生の取り組みを評価したうえで、特に効果的な提案については企業や沖縄観光コンベンションビューローなどでの実施を検討していきたいとのコメントがありました。

今回の報告会は、運営をすべて学生が実施する「実行委員会」方式で行いました。事前学習、現地研修、事後学習を通して参加者にとっては有意義な研修になりました。



発表会の様子



学生からの挨拶は全て英語で行われました

野口ゼミから税理士試験全科目合格者が出ました



学長に報告する東恩納君

野口浩教授（観光産業科学部・産業経営学科）のゼミ生である東恩納拓麻君（人文社会科学部・総合社会システム専攻2年生）が、難関試験である税理士試験の全科目合格を果たしました。

税理士試験は全11科目の中から5科目選択して（ただし、簿記論、財務諸表論は必修、法人税法もしくは所得税法も必修）受験をする科目合格制度です。1科目の合格率は例年12%前後で推移しています。全科目合格にたどりつけずに挫折する受験者は多く、また、全科目合格までに10年以上かかる場合もあり、非常に難しいことがわかります。

東恩納君は、観光産業科学部・産業経営学科3年生時に簿記論と財務諸表論に合格。続けて4年生時に法人税法に合格。さらに、人文社会科学部・総合社会システム専攻1年生時に消費税法に合格。そして、2年生時に相続税法に合格し、税理士試験の全科目（5科目）合格を手に入れました。

東恩納君は、大学および大学院における自分を取り巻く環境の素晴らしさについて次のように述べています。「観光産業科学部・産業経営学科および人文社会科学部・総合社会システム専攻においては、勉強を気持ち良く行える環境が揃っていました。まずは先生方です。先生方から時には厳しく時には優しくご指導を賜りました。先生方からの導き無くして税理士試験を突破することはできなかったと思います。次に仲間です。会計や税法を学んでいる仲間が周りに多く、その仲間達と励まし合いながら勉強や研究を行ってきました。このような環境に身を置くことができた自分は幸せ者だと感じています。」

東恩納君は、2016年4月からEY税理士法人沖縄事務所に就職することが内定しており、大学院修了後は、同法人で活躍することが期待されています。



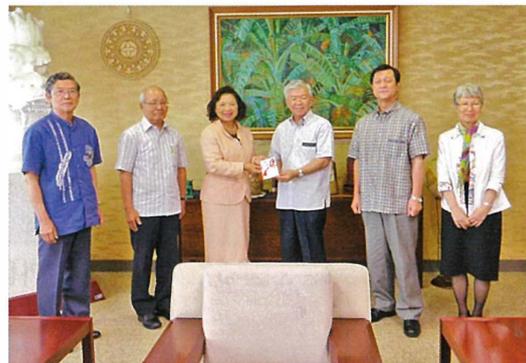
右から牛窪教授（産業経営学科長）、大城学長、東恩納君、志村教授（観光産業科学部長）、渡名喜理事（教育・学生支援担当）

琉球大学同窓会から課外活動奨励金を贈呈

6月9日(火)、琉球大学同窓会会長の幸喜徳子氏、副会長の仲門勇市氏及び儀保博信氏が学長室を訪れ、本学学生の課外活動を援助することを目的とした奨励金として、120万円の寄附が贈呈されました。今年に限っては、体操部のラート購入に係る費用として20万円増額して頂きました。

幸喜徳子会長からは、「本学学生の課外活動のますますの発展に役立ててください」との言葉が述べられました。大城肇学長からは、「財政事情の厳しい折、毎年多額のご寄付をいただいている中、今年度は増額していただき感謝いたします。学生の課外活動に有効に活用させていただきます」とお礼が述べられました。

この「課外活動奨励金」は、平成元年から毎年多額の寄附金を同窓会よりいただいております。昨年度は県外での大会等に参加した体育系サークル27団体と発表会に出場した文化系サークル1団体に対して、当該奨励金が交付されています。



琉球大学同窓会創立60周年記念式典を開催

7月11日土曜日、那覇市のホテルロイヤルオリオン「旭の間」において、琉球大学同窓会創立60周年記念式典が盛大に行われました。

式典に先立ち、1957年に琉球大学英文科をご卒業された岸本正之氏による「地球社会の明日を読む」と題する記念講演がありました。岸本氏は、岸本ファミリー・インターナショナル社(米国)の代表取締役社長としてご活躍されながら、岸本ファミリー・個人慈善基金の代表取締役として、多摩子夫人と共に世界中で数々の慈善事業を支援しておられます。

式典は、琉球大学の歌「雲よ湧け千原の空に」斉唱で始まり、幸喜徳子会長の挨拶、儀保博信副会長による同窓会の活動状況報告がありました。続いて、大城肇琉球大学長、翁長雄志沖縄県知事(安慶田光男副知事代読)、上間明西原町長のご祝辞、幸喜会長から同窓会の支援企業等への功労者表彰・感謝状贈呈がありました。また、大城学長から岸本氏へ琉球大学名誉博士号の学位記が授与され、岸本氏が受賞者代表として謝辞を述べられました。



功労者表彰・感謝状贈呈



岸本氏への名誉博士号学位記授与



式典は盛会裡に終了し、引き続いて祝賀会が華やかに開催されました。佐喜眞淳宜野湾市長によるご祝辞、同窓生による琉球舞踊やゴルフコンペ表彰式などで盛り上がった会場では同窓生が活発に交流する様子が見られ、琉球大学同窓会のますますの発展を確信させるものとなりました。

東江美代子氏への感謝状贈呈式

第11代琉球大学長の故東江康治氏のご令室様の東江美代子氏から、本学の「人材育成に役立ててほしい」とのご意向により寄附をいただきました。

ご厚意に感謝の意を表し、本学から感謝状を贈呈することとなり、8月13日(木)、学長室において感謝状贈呈式が執り行われました。

贈呈式には、東江美代子氏、ご令嬢様、故東江康治氏のご令弟様で本学名誉教授の東江平行氏、西田理事が出席し、大城学長から、感謝の言葉が述べられ、感謝状が贈呈されました。

贈呈式後の懇談では、本学の40周年記念誌及び50周年記念誌等に掲載されている東江元学長の写真等が紹介され、当時の思い出話に東江美代子氏も聞き入っていました。



医学部医学科地域枠学生 浦崎副知事を表敬訪問

平成27年8月17日(月)、医学部医学科の地域枠新生16名が沖縄県庁を訪れ、医学部関係者が同席して浦崎副知事への表敬訪問が行われました。

地域枠の学生は昨年度より5名増え、今年度は17名が入学し、沖縄県の支援を受けて勉学に励んでいます。

松下医学部長の挨拶に続いて、学生達が自己紹介とともにそれぞれの抱負を述べました。また、学生代表として石垣島出身の高橋真之介君が挨拶し「石垣の医師不足を何とかしたいとの思いから医師を志した。僻地・離島医療への貢献は我々の使命であり、そのためにお互い切磋琢磨し、また支え合いながら学んでいる。県の支援のおかげで充実した大学生活がおくれている。」と、地域医療への熱意と沖縄県への感謝を伝えました。

浦崎副知事からは、「皆さんの熱い思いが伝わった。多くの離島をかかえた沖縄県では医師の確保が困難であり、皆さんは地域医療を担う県の宝。立派な医師となれるよう支援していく。沖縄県民の期待を担っていることを自覚し感謝の心を忘れずに、体に気をつけて頑張ってもらいたい。」と激励のお言葉をいただきました。

最後は出席者全員で記念撮影を行い、和やかな雰囲気の中で表敬訪問が終了しました。



「トビタテ! 留学JAPAN地域人材コース」壮行会開催

文部科学省平成27年度(第3期)官民協働海外留学支援制度「トビタテ!留学JAPAN日本代表プログラム」地域人材コースに採択された「沖縄からアジアへトビタテ!留学JAPANプロジェクト」の第1期派遣留学生7名を激励するため、9月25日に琉球大学において壮行会を開催しました。

地域人材コースは沖縄産学官協働人財育成円卓会議が新規で採択された沖縄県内大学等在籍学生を対象に実施するプログラムで、第1期生として琉球大学生3名、名桜大学生2名、沖縄キリスト教学院大学生1名、サイ・テク・カレッジ学生1名が合格しました。参加学生は、県内での事前インターン研修を経て10月からアジアへ派遣され、語学研修(4週間)とインターンシップ(8週間)を行います。

壮行会には、文部科学省 佐野太大臣官房審議官、官民協働海外留学創出プロジェクト 檜田剛明シニアストラテジックマネージャー、沖縄経済同友会 玉城義昭代表幹事(沖縄銀行頭取)、瀧辺美紀副代表幹事((株)ジェイシーシー代表取締役副会長)、沖縄産学官協働人財育成円卓会議 大城肇代表(琉球大学長)、沖縄キリスト教学院大学 中原俊明学長、サイ・テク・カレッジ 遠山英一理事長を始め、沖縄県庁、沖縄総合事務局、沖縄県内で寄付やインターン受入れ等ご協力いただいた企業代表者、県内大学関係者等約50名が参加しました。

壮行会では、主催者挨拶として、大城沖産学官協働人財育成円卓会議代表から、本事業にご協力いただいた県内企業、関係機関への謝辞や派遣留学生への激励がありました。引き続き、佐野太大臣官房審議官、玉城沖産学官協働人財育成円卓会議代表幹事、瀧辺副幹事が、それぞれ本事業や地域で期待される人材像や派遣留学生への激励の言葉を述べました。

また、トビタテ!留学JAPAN第1期生として留学した宮里雅樹さん(琉球大学学生)、加賀若菜さん(琉球大学学生)から留学報告があり、留学体験を通じた後輩トビタテ生への激励のメッセージがありました。

続いて、7名の派遣留学生が留学計画について発表を行いました。それぞれ、県内での事前インターンの経験や海外インターンの計画等について発表し、プログラム参加を通して将来どのような人材になりたいか、日本や沖縄の経済・産業の発展にどのように貢献したいかなど力強い決意表明がありました。

派遣留学生7名は、香港、台湾、インドネシア、ベトナムに10月から3ヶ月間留学します。帰国後は、県内企業での事後インターンシップを行い、事後研修として2月に成果報告会を行う予定です。

《沖縄経済同友会ホームページにも本プログラム壮行会の様子が紹介されています。》

<http://okidouyukai.jp/news/1475.html>

《沖縄からアジアへトビタテ!留学JAPANプロジェクトホームページ》

<http://www.tobitateokinawa.com/>

平成27年度(第3期)官民協働海外留学支援制度
～トビタテ!留学JAPAN日本代表プログラム～

【地域人材コース

「沖縄からアジアへトビタテ!留学JAPANプロジェクト」派遣留学生】

大学名	氏名	派遣予定国・地域
国際観光人材コース		
琉球大学	具志堅 絵美理	香港
沖縄キリスト教学院大学	照屋 葉月	台湾
サイ・テク・カレッジ	屋宜 里佳	インドネシア
国際IT人材コース		
琉球大学	真栄城 佑理 《地域協議会卒業生》	香港
名桜大学	比嘉 彩乃	ベトナム
国際物流人材コース		
琉球大学	屋我 星乃	香港
名桜大学	金城 彩香	香港



佐野 文科省大臣官房審議官による挨拶



玉城 沖縄経済同友会代表幹事による挨拶



刈辺 沖縄経済同友会代表副幹事による挨拶



トビタテ派遣学生との記念撮影

第2回琉球大学ホームカミングデーを開催

11月14日（土）に、第2回琉球大学ホームカミングデーが開催されました。

本イベントは、本学卒業生や地域の方々をお招きし、世代を超えた新しい交流と、琉球大学の「今」を知って頂くことを目的としたもので、在学生や卒業生、本学教職員及び地域の方々等、約70名が参加されました。

ホームカミングデーの幕開けには、八重山芸能研究会により「目出度節（めでたいぶし）」及び「浜遊び（はまあすいび）」が披露され、プロ顔負けの迫力ある演舞で観客を魅了していました。

続いて有限会社プロジェクトZenko代表取締役のいらみなぜんこ氏を講師としてお招きし、「童謡唱歌の世界～子供の頃の自分に会いたいあなたへ～」をテーマに講演が行われました。

いらみな氏は、23年前から全国の童謡作家のふるさとを訪ね、取材を続けており、「七つの子」や「青い眼の人形」を含む8曲の童謡を披露して頂きました。観客はそれぞれの曲の魅力や、童謡の奥深い背景、歌声に聴き入っていました。

その後は琉球大学生協中央食堂にて懇親会が開かれ、学長の挨拶に続き、琉球大学同窓会の幸喜徳子会長による乾杯の挨拶の後、開学当時から近年までの写真や本学の最近の実績が上映され、参加者は昔の大学の様子等を眺めながら和やかに懇談を行い、楽しいひとときを過ごしました。



講演を行ういらみなぜんこ氏



八重山芸能研究会による演舞

■ 平成28年度学年暦※1

前学期

(平成28年)

4月1日(金)	学年及び前学期開始
4月1日(金)	成績通知書交付・授業時間配当表配布
4月4日(月)～4月7日(木)	新入生オリエンテーション
4月4日(月)～4月7日(木)	前学期仮登録
4月5日(火)	入学式
4月8日(金)	前学期履修登録確認表配布
4月11日(月)	前学期授業開始
4月11日(月)～4月22日(金)	登録調整期間
4月12日(火)～4月26日(火)	定期健康診断
5月22日(日)	開学記念日
5月28日(土)	体育祭
6月1日(水)～10月31日(月)	教育実習
6月23日(木)	慰霊の日(休講)
7月4日(月)	木曜日授業振替え(※4)
7月16日(土)	琉球大学説明会 (オープンキャンパス)
8月2日(火)～8月5日(金)	前学期試験期間(※2)
8月8日(月)	
8月9日(火)	英語全学統一テスト(※5)
8月10日(水)、8月12日(金)	予備日(※3)
8月15日(月)	英語全学統一テスト予備日(※5)
8月16日(火)～9月30日(金)	夏季休業
9月24日(土)～9月25日(日)	琉大祭
9月26日(月)	成績通知書交付・授業時間配当表配布
9月26日(月)～9月28日(水)	後学期仮登録
9月30日(金)	後学期履修登録確認表配布
9月30日(金)	前学期終了

後学期

(平成28年)

10月1日(土)	後学期開始
10月3日(月)	後学期授業開始
10月3日(月)～10月17日(月)	登録調整期間
10月9日(日)	琉大祭予備日
12月1日(木)	推薦入試(休講)
12月23日(金)～1月4日(水)	冬季休業

(平成29年)

1月5日(木)	後学期後半授業開始
1月10日(火)	月曜日授業振替え(※4)
1月13日(金)	センター試験準備(休講)
1月14日(土)～1月15日(日)	大学入試センター試験
2月6日(月)～2月10日(金)	後学期試験期間(※2)
2月13日(月)	英語全学統一テスト(※5)
2月14日(火)、2月15日(水)	予備日(※3)
2月16日(木)	英語全学統一テスト予備日(※5)
2月17日(金)～3月31日(金)	春季休業
2月25日(土)～2月26日(日)	一般入試「前期日程」
3月12日(日)～3月13日(月)	一般入試「後期日程」
3月24日(金)	卒業式
3月31日(金)	学年及び後学期終了

- ※1: 医学部医学科第2年次以降の学年暦はこの学年暦に準じ、医学部において定める。
- ※2: 試験期間は期末試験や補講を行う。
- ※3: 予備日は台風等で全学休講になった日の授業又は定期試験を行う。
- ※4: 7月4日(月)は木曜日の振替日、1月10日(火)は月曜日の振替日とし、他の曜日の講義・試験・補講・実習等は行わない。
- ※5: 前学期は大学英語の受講者が対象。後学期は前学期未履修者及び3年次が対象。

大学からのお知らせ

授業料の納入について

○授業料納入期限

前学期	後学期
4月30日	10月31日

期限内に必ず納めてください。大学での教育は皆様の授業料で賄われております。
※授業料の口座振替日が休日の場合は、金融機関の翌営業日に振替します。
※授業料免除申請者は、結果がでるまで徴収が猶予されます。
※期限後、督促をしてもなお未納の場合は除籍になりますので、特にご注意ください。

そんなときは
口座振替
をご利用ください。

口座振替に関する問い合わせ先

琉球大学財務部経理課収入・支出係 [電話番号] 098-895-8058

授業料の金額については、下記を参照ください。

[大学公式ホームページ]→Contentsの【学生生活】→【授業料・入学料等の金額について[PDF]】
http://www.u-ryukyu.ac.jp/internal/campus_life/schoolfees/schoolfees.pdf

保護者の皆様へ

本誌は、入学時に登録された学生の保護者等の住所へ送付しております。
住所変更等がございましたら、学生本人から、学生の所属する学部の窓口まで届け出るをお願いします。

琉大ニュースレターは琉球大学公式ホームページでもご覧いただけます。 <http://www.u-ryukyu.ac.jp/>

[大学公式ホームページ]→[大学情報]→[広報]→[琉大ニュースレター]

携帯電話で下記のQRコードを読み込むと、琉球大学の入試情報ケータイサイトにアクセスできます。

※バーコードリーダー機能付きの携帯電話で読み取れます。「琉球大学入試情報ケータイサイト」 <http://daigakujc.jp/u-ryukyu/>

QRコード

